

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

グギ・ワ・ジオンゴのWizard of the Crowにおける 翻訳の政治性と手法の分析

著者	田平 光希
著者別名	TABIRA Koki
ページ	1-28
発行年	2019-03-24
学位授与年月日	2019-03-24
学位名	修士(国際文化)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	http://hdl.handle.net/10114/00022263

修士論文

指導教員 栗飯原文子 准教授

論文題名

グギ・ワ・ジオンゴの *Wizard of the Crow* における翻訳の政治性と手法の分析

国際文化研究科
国際文化専攻 修士課程
田平 光希

論文要旨

国際文化研究科 国際文化専攻
田平光希

グギ・ワ・ジオンゴの *Wizard of the Crow* は、ギクユ語で書かれ、その後グギ自身によって英語に翻訳された小説である。本論では、「翻訳された小説である」という観点から *Wizard of the Crow* の読解が行われる。グギがそう読まれるように翻訳しているということ、そしてそのように読まれることで政治的な意味が生じうること、これらを明らかにすることが本論の目的である。

序章では、グギの経歴や *Wizard of the Crow* の書誌やあらすじなどの基本的な情報が整理された。グギの創作活動がケニアの現実政治と関わりの深いことが確認され、対象とする *Wizard of the Crow* もその例にもれず、特に二代目大統領のダニエル・アラップ・モイの独裁を諷刺するものであるという評価が確認された。また、先行研究には翻訳という観点からの分析が少ないこと、特にグギ自身が翻訳を行ったという視点からのテキスト分析が行われていないことが指摘され、本研究の意義が示された。

第 1 章では、グギの言語観について考察が行われた。1980 年代に書かれた論考に遡り、*Wizard of the Crow* が書かれた 2000 年代に至るまでにどのような言語観の変遷があったかが整理された。対象とされたテキストは主に 1986 年の *Decolonizing the Mind: The Politics of Language in African Literature* と、2012 年の *Globalectics: Theory and the Politics of Knowing* である。1980 年代のグギは、帝国主義の言語を用いず、これからは民族語で創作を行うという主張をし、注目を集めた。しかし 2000 年代のグギは、書かれた小説が世界中に翻訳されることで諸言語間に対話が生じることの方により重きを置くようになった。そしてそこには西洋中心主義的な観点からの文学を否定するという政治的な含意があることが示された。

第 2 章では翻訳という観点から、*Wizard of the Crow* の具体的なテキスト分析が行われた。*Wizard of the Crow* の中に表れる翻訳を示すモチーフが検証された。表紙やエピグラフの分析から始まり、作中に登場する「バベルの塔」や「鏡」、「身体改造」が、読者に翻訳を暗示することが示された。さらに、翻訳であることをほのめかす翻訳の手法が詳述された。作中人物がどの言語を使用して会話しているかを示す記述や、作中人物によるエピソードの語り直しによって生じる語句の差異、また文体として特徴的な同格表現の使用法が分析された。これらの手法により、自分が読んでいる小説が翻訳されたものであるという可能性に読者は導かれることが明らかにされた。また、このような読解の正当性を補強するために、「自己翻訳」の研究が参照された。「自己翻訳」された作品の翻訳のされ方には作者の意図が色濃く表れることや、アフリカの作家たちが政治的な抵抗として「自己翻訳」を行ったことなどが確認された。

第 3 章では、翻訳であることに読者の意識を導くという前章までの議論をふまえ、対話を加速させるために用いられた手法が分析された。小説が西洋小説の様式に則って書かれていることを強調することによって、*Wizard of the Crow* がギクユ語小説から翻訳されたものであると判明した際に、読者に対して翻訳を強く印象づけることができるという落差の手法が提示された。ここではポストコロニアリズムが参照され、翻訳研究との関連性や、西洋小説の枠組みを利用して小説を書くことが「キャノンの書き換え」という政治的な抵抗をも意味していたことが示された。また、「作中作」の手法や、作中でグギが過去に発表した小説や他のアフリカ作家による作品に言及する手法は、読者の意識を小説世界の外に導き、俯瞰的に小説を眺めさせ、翻訳であることへの気づきに読者を誘導するという効果があることが示された。

終章では上記の章で得た考察をまとめ、結論が示されるとともに、今後の研究の展望が述べられた。

目次

序章	<i>Wizard of the Crow</i> への軌跡	1
1.	グギ・ワ・ジオンゴの政治性	1
2.	先行研究と本論の構成	2
第1章	グギ・ワ・ジオンゴの言語観	4
1.	<i>Decolonizing The Mind</i> での言語観	4
2.	<i>Globalectics</i> での言語観	6
3.	過去の小説との比較	8
第2章	翻訳の手法	10
1.	翻訳を連想させるモチーフ	10
2.	「自己翻訳」の研究	12
3.	翻訳であるという痕跡を残す翻訳	14
第3章	対話を加速させる手法	17
1.	ポストコロニアリズムと翻訳	17
2.	小説の枠組みを意識させる手法	18
終章	翻訳の政治性	20
1.	翻訳の政治性	20
2.	今後の研究の展望	20
注	22
参考文献	27

序章 *Wizard of the Crow* への軌跡

1. グギ・ワ・ジオンゴの政治性

本論の目的は、グギ・ワ・ジオンゴの *Wizard of the Crow* を翻訳小説として読解することである。グギがそう読まれるように翻訳をしているということ、そしてそのように読まれることで政治的な意味が生じうるということ、これらを私たちは明らかにする。

グギは政治的な色彩が濃い作家として知られている。講演や評論の中で、また小説や演劇等の創作活動を通じて、グギは政治的な主張を表明してきた。これにはグギの生涯がケニアの政治と密接に関わっていたことの影響がある。まずはグギの伝記をケニアの歴史と並行させる形で確認してみよう¹。

1938 年、首都ナイロビ北西にあるリムルのカミリズ村でグギは生まれた。ケニアがイギリスの東アフリカ保護領とされ、土地の収奪や徴税、原住民居留区への閉じ込めや農場労働の提供等を余儀なくされていた時代である。第二次世界大戦中には、ケニア人の青年男性は労働力として徴兵され、多数の死者を出すこととなった。グギの異母兄弟からも二人が徴兵され、一人は死亡している。戦後、白人支配に対する抵抗活動が激化する。植民地政府は 1952 年に非常事態宣言を出し、「マウマウ戦争」が起こる。長兄ムワンギがケニア土地自由軍という独立を目指す秘密結社に参加したため、グギは、ホームガードや白人の役人に自宅を監視され、たえず詰問にさらされる日々を送った。こうしてグギ少年は政治への関心を深めていく。

1963 年にケニアは独立する。しかしその後、ケニア・アフリカ民族同盟 (KANU) による一党独裁へと歩みを進める。二代目大統領のダニエル・アラップ・モイは 24 年間にわたる長期の圧政を敷いた。このような状況下においても、グギは政治的な発言を止めなかった。1977 年の年末、ついにグギは政治犯として逮捕されてしまう²。独立 15 周年記念日の恩赦により 1 年後には釈放されたが、その後も講演や評論等で旧宗主国や現政権に対する批判を展開した。1982 年、グギはイギリスからケニアへ戻ろうとしていたところ、帰国をすれば空港で逮捕されるという情報を入手し、そのまま亡命生活へと入った。以来、2004 年の一時帰国を除いて、ケニアには戻らなかった。なお、一時帰国中にグギとその妻は強盗に遭い、ひどい暴行を受けてしまう。これをグギはモイの差し金と考えている³。グギの生涯は権力との戦いの連続であった。

グギは、学生時代に英文科の文芸誌へ短編小説を寄稿するところから作家としてのキャリアを開始した。出世作にあたる 1964 年の *Weep not, Child* がマウマウ戦争を舞台にしているように、多くのグギの作品はケニアの政治状況を物語の背景に持っている。*The River Between* は 1930 年代、*Weep not, Child* は 1940、50 年代、*Grain of Wheat* は独立前の 1963 年 12 月、*Petals of Blood* は 1960、70 年代の独立後が舞台である。さらに小説内の時間としては、「主としてイギリス人が内陸部に侵入し、併呑した二十世紀の初頭まで扱われている」⁴。グギは創作活動を通じてケニアの政治や歴史に言及し、政治的主張をすることを試みてきた。

現実社会との関わりの中に見いだされるものがグギにとっての政治である。グギは言う。「想像的文学が一個の民族の意識を扱い、それに影響力を行使しようと努めるかぎり、また政治が社会における権力の働きと権力関係を扱い、これらを対象とするかぎり、両者は必ず作用し合うものです」⁵。創作活動と政治は本来的に結びついているのだ。

本論で扱う *Wizard of the Crow* もケニアの政治と密接な関わりがある。*Wizard of the Crow* は、1997 年 5 月からグギの母語であるギクユ語で書きはじめられた。2004 年から 2006 年にかけて *Mũrogi wa Kagogo* の題名で 4 巻のギクユ語版が出版され、2006 年にグギによる翻訳で英語版が出版された⁶。前作からおよそ 20 年が経過して発表された長編小説である。後の議論を明確にするために、物語のあらすじを見てみよう。

舞台はアブレリア自由共和国というアフリカ大陸にある架空の独立国家である。そこでは Ruler という独裁者による一党独裁が行われている。大臣たちは Ruler に取り入ることに躍起になり、本編では主に国務大臣の Sikiokuu と外務大臣の Machokali が寵愛を争っている。Ruler の誕生日を祝うセレモニーで、Machokali は Ruler の権力をたたえるために世界一の高さの塔を建設する計画を発表し、Sikiokuu を出し抜く。国内には Ruler の独裁に反対する地下組織があり、本作のヒロイン Nyawira はそのメンバーである。主人公は Kamiti という青年である。職を求めて Nyawira の勤務先である事務所を訪れるが、経営者の Tajirika からは残酷に断られてしまう。ある日 Kamiti は警官に追われることになり、たまたま合流した Nyawira と一緒に彼女の家に逃げこむ。Kamiti は機転を利かせ、家の前にここが「Wizard of the Crow (カラスの妖術師)」の家であるという看板を掲げる。それを見て警官たちは恐怖し、その場を立ち去る。しかしその後、警官の一人が「カラスの妖術師」に悩みの相談をするために再び現れる。やむをえず Kamiti は「カラスの妖術師」のふりをして話を聞いてあげたところ、なんと悩みが解決。以後評判になってしまい、Kamiti と Nyawira は妖術師を演じつづけることになる。まもなく恋に落ちる二人だが、Nyawira は反政府組織の一員であることが露見し、政府から追われる身になってしまう。一方、Ruler は塔建設の資金援助を募るために渡米するが、全身が膨張し、しかも声を発することもできないという謎の病にかかる。そしてそれを治療するために「カラスの妖術師」はアメリカへ呼びよせられる…。このような物語が、さまざまな語り手の視点から、時系列の前後を繰り返しながら語られることになる。

Wizard of the Crow の背景にはモイによる独裁時代のケニアがある。グギはそのことを巻末謝辞で明記している⁷。作中で語られる Ruler の経歴はモイのそれと類似している⁸。塔建設計画は、実際にモイが KANU の本部として 60 階建てのオフィスタワーの建設を企てていたことが念頭にあるだろう⁹。誇張されているとはいえ、ケニアの政治との共通点は多い。

以上確認してきたところによれば、*Wizard of the Crow* と政治との間には何らかの関連があるようである。グギにはどのような政治的な意図があるのか。そしてその目的を達成するために、いかなる手段を用いているのか。私たちはそれを「翻訳¹⁰」であると考えます。

2. 先行研究と本論の構成

私たちはグギの翻訳行為が政治的なものであると考える。なかでも、ギクユ語から英語へとグギ自身が翻訳をしているということに着目がされる。それがどのような政治的な意味を持ち、どのように小説に表現されているのか、これが本論における私たちの関心である。この観点から *Wizard of the Crow* を論じた研究は少ない。先行研究を見てみよう。

まず、*Wizard of the Crow* がモイ政権や他のアフリカ諸国で見られる政治の腐敗を描いているという指摘は多くの論者によってなされている。*Wizard of the Crow* を諷刺として読むのはきわめて一般的なことである。

グギの他の小説との関連を考察する研究も少なくない¹¹。過去の作品との共通点や相違点を見つけ、比較し、*Wizard of the Crow* の現代的な意味を考察するものである。フェミニズムの見地から、Nyawira を筆頭に過去のグギの小説に登場する女性たちの抵抗の様相をたどる論考もある¹²。

アフリカの伝統的な口承文学の観点からの研究も多く見られる¹³。宮本正興は、*Wizard of the Crow* 等のギクユ語小説の重要性について、「誰もが日常使っている民族語で書くことで、話し言葉と書き言葉のあいだの相互の表象関係を回復させ、大多数のアフリカ人が置かれた言語生活の植民地的疎外状況を克服しようとしていることである。さらに、アフリカ小説の源流を、農民の口承文学に辿り、民族語による文化創成を通じて、アフリカ・ルネサンスに新しい展望

を切り開こうとしている点である¹⁴」と要約した。このような評価は既に定着していると言ってよい。

Wizard of the Crow を何らかのジャンル小説の中に位置づける論考も多い。先に見たあらずじからもわかるように、独裁者小説はその代表例である。これはしばしばマジック・リアリズムという用語とあわせて論じられている¹⁵。ディストピア小説と捉える論者もいる¹⁶。Sci-Fi やゴシック小説の系譜で論じられる場合もある¹⁷。口承文学に照らして、ミハイル・バフチンが提唱したポリフォニー小説のひとつとみなされることもある¹⁸。

ここで私たちの指摘したい点は、これらの先行研究には、*Wizard of the Crow* が翻訳された作品であるという視点が欠けているということだ。言ってみれば、*Mũrogi wa Kagogo* が *Wizard of the Crow* として翻訳をされていてもいなくても、論旨が変わらないのである。冒頭で述べたように、私たちの目指すところは翻訳小説として *Wizard of the Crow* を読みとくことにある。

もちろん *Wizard of the Crow* を翻訳の観点から論じる者もないわけではない。作中に登場するギクユ語あるいはスワヒリ語の意味を解説する論考¹⁹や、*Mũrogi wa Kagogo* と *Wizard of the Crow* の異同について説明をする論考もある²⁰。ただし、これらは情報の提示のみに留まるものがほとんどだ。登場人物が場所を移動することを、翻訳論の視点から論じたものがある程度である²¹。中にはグギ自身が翻訳をしていることに着目した論考もある²²。しかし、グギがこれまで翻訳について述べたことの概要にふれる程度であり、それが小説中にどのような形で現れているのかまで掘りさげることはできていない。

本論では先行研究において不十分だった観点からの研究を行うことで、これまでになされた研究の成果を補完することができると考える。

研究は以下の構成にて進められる。

第 1 章ではグギ自身がどのような言語観を持っていたのかについて考察される。内容分析をする前の準備にあたる作業である。1980 年代に書かれた論考に遡り、*Wizard of the Crow* が書かれた 2000 年代に至るまでにどのような言語観の変遷があったかが整理される。

続く第 2 章では翻訳という観点から具体的なテキスト分析が行われる。*Wizard of the Crow* の中に表れる翻訳を暗示するモチーフや、翻訳であることをほのめかす翻訳の手法が詳述される。このような読解の正当性を補強するために導入されるのが「自己翻訳」の研究である。

第 3 章では、前章までの議論の拡張が行われる。ポストコロニアリズムの研究が参照され、小説の外に読者の意識を導く手法が明らかにされる。

終章では結論が示されるとともに、今後の研究の展望が述べられる。

なお、本論では英語版のみが研究の対象とされる。ギクユ語版と英語版の異同等の分析は基本的に行われない。本論においては、ギクユ語版を参照できないという状況こそが重要なのだという考察が展開されるためである。事実上、ギクユ語版を入手することは困難であると言ってよい²³。

また本論では、先行研究として主に英語文献が参照されている。邦語文献は蓄積が十分とは言えない状況である²⁴。その意味で、本論はそのような日本での研究状況に裨益することが期待される。

第1章 グギ・ワ・ジオンゴの言語観

1. *Decolonizing the Mind* での言語観

本章では *Wizard of the Crow* を書いた際にグギがどのような言語観を有していたのかを明らかにすることが目標とされる。*Wizard of the Crow* にそれがどのように表れているのかを分析するための予備作業である。なお、ここでいう言語観とは、言語について、また創作や翻訳についての考え方のことを指す。

グギの言語観が表れているものとして最も重要なもののひとつが、*Decolonizing the Mind: The Politics of Language in African Literature* (以下、*Decolonizing the Mind*) である。グギが1986年に発表した評論集であり、多くの論者が参照する影響力のある書物となった。日本への紹介も早く、翌年の1987年には日本語訳が出版されている。2010年には日本語訳の新版が出版され、その影響の大きさを伺うことができる。世界的な評価は言うまでもない。2010年で原著は13版を数え、アフリカ人によって1980年代に書かれたもののうち最も重要な作品と評価をした批評家もいるそう¹。まずは *Decolonizing the Mind* でグギが何を主張していたのかを確認しよう。

Decolonizing the Mind においてグギは、英語ではなく、ギクユ語で創作活動を行うことを宣言した。実際には1977年から、グギはギクユ語での創作活動を始めている。1977年には戯曲 *Ngaahika Ndeenda* を発表し、1978年には獄中にいながらにして小説 *Caitani Mũtharaba-Inĩ* を執筆した。ただしアフリカの言語による創作活動への関心や傾向はそれ以前からあったようである²。

グギの問題意識は、英語という支配的言語の押しつけによって、人々の文化が破壊されてしまうことにあった。グギは次のように考えた。言語とはコミュニケーションの手段であるとともに、文化を伝達するものである³。文化とは、とりわけ口承文学 (orature) と文学 (literature) を通してもたらされる⁴。したがって、帝国主義の言語で書かれた文学作品が広まれば、それによって文化は破壊されてしまうだろう。このようなロジックに則り、グギはアフリカの諸言語で創作活動を行うことを唱えた。

グギの批判は、帝国主義の言語をアフリカ流に変えて小説を発表するアフリカ人作家へも及ぶ。アフリカの諸言語を帝国主義の言語に従属させることへの批判⁵、農民と労働者を読者から排除していることへの批判⁶が主な論点である。

このようなグギの主張は、決して素直に受けとめられたわけではない。グギの創作活動はヨーロッパ中心の理論によって支えられているのではないか、評論を依然として英語で発表するのはなぜなのか、なぜスワヒリ語を使用しないのか、等の批判がある⁷。英語で書かないという宣言自体が、これまでの英語小説で勝ちとった名声によって支えられているという指摘もある⁸。他にも、グギ自身は西洋社会に住み、そしてそこで大学教授という職を得ている点について、一貫性と責任感の無さを嘆くものもあった⁹。ギクユ語で小説を書くという宣言は、このように毀誉褒貶の激しい文学的事件であった。当時のグギは既に英語作家としての地位を確立していたため、英語を捨てるという宣言はいつそうセンセーショナルなものとして受けとめられたのである。

宣言に従い、グギはギクユ語で小説を発表した。長編小説に使用された言語を時系列でまとめると、表1のようになる¹⁰。

表 1

長編小説の題名	発表年	創作に使用された言語
<i>Weep not, Child</i>	1964	英語
<i>The River Between</i>	1965	英語
<i>Grain of Wheat</i>	1967	英語
<i>Petals of Blood</i>	1977	英語
<i>Caitani Mũtharaba-Inĩ (Devil on the Cross)</i>	1980	ギクユ語 (グギ自身が英語に翻訳)
<i>Matigari Ma Njirũngi (Matigari)</i>	1986	ギクユ語 (第三者が英語に翻訳)
<i>Mũrogi wa Kagogo (Wizard of the Crow)</i>	2004	ギクユ語 (グギ自身が英語に翻訳)

この整理を見てすぐに気づく点は、グギの翻訳は自らの主張を裏切っているように見えるということである。英語を捨てたはずのグギが自らの手で英語に翻訳していることはどうしても平仄があわない。グギは、英語の構造そのものが差別的だとまで言っているのだから、なおさらである¹¹。

この矛盾に対して、作家は国際的な名声を欲して国際言語である英語を使用するのが常だ、という回答を与えることもできる¹²。あるいは、金銭面からの回答も可能だろう¹³。たとえば土屋哲は書いている。「そのためングーギは、まずキクユ語で書いて、二、三年おくれて英語版を出すという、手の込んだ創作活動が続けている。英語版は世界のより多くの人に読んで貰いたいという念願からであるにしても、一方、亡命中の自らの苦しい台所をまかなうためのものであることは、いうまでもない。この件で、ガーナのナショナリスト作家、コフィ・アゴヴィに意見を聞いてみた。すると『これはングーギにしてはじめてできることで、他の作家では無理だ。ングーギはハイネマン出版社と特別な関係をもっているからね』という答えが返ってきた。ングーギは特別だというわけだ¹⁴」。このような穿った見方は少なくない。確かに、民族語による活動を始める前後のグギは、演劇の上映禁止令のため多額の負債を背負いこんでいた。逮捕・拘禁後にはナイロビ大学への復職ができず、金銭面でつましい生活を余儀なくされていたのは事実である¹⁵。

実際にグギは、英語への翻訳についてどのようなことを述べているのだろうか。ここで強調しなければならない点は、*Decolonizing the Mind* において、グギは民族語で小説を書くことに加え、既に翻訳の重要性を述べているということだ。ギクユ語で小説を書くことの方が大々的に喧伝されているせいか、その部分はしばしば見過ごされてしまう。これはグギの主張が孕む矛盾を見ないようにする私たちの無意識の表れといえるのかもしれない。

結論を先に述べると、そこに理論的な矛盾はないのである。

第一に、グギは翻訳を創作行為とは捉えていない。*Decolonizing the Mind* において、writer と translator は明確に区別されている。グギにとって、創作の言語と翻訳の言語は異なる水準にあるものである。

第二に、グギは翻訳によって、文学の間に、すなわち言語や文化の間に直接的な対話が成立することを重要だと考えている。したがって、自分の小説が英語へと翻訳されることは何ら差し支えがない。*Decolonizing the Mind* において、グギは自作の翻訳が幾つかの言語で進行中であることを述べている¹⁶。そこでは、英語がスウェーデン語やノルウェー語等の他の言語と併記され、英語を植民者の言語として退ける様子はない。ただし、グギが英語への翻訳よりも、アフリカの諸言語への翻訳を優先していることは確かである。自作のスワヒリ語翻訳により、ギクユ語とスワヒリ語との間に直接的なコミュニケーションが成立したことを、グギは最も重要なことだと考えている¹⁷。

この考え方からすれば、誰がどの言語で翻訳をしてもかまわないということになる。グギ自身が翻訳をしなくてもよい。商業的な成功や国際的な名声はグギの関心の埒外である。翻訳をする主体について、*Decolonizing the Mind* において言及はない。時間と能力のある翻訳者が想定されているのみである¹⁸。宮本正興によれば、1986年の時点で、「グギは自らの作品の英語への翻訳すらも他人に譲るいっぽう、スワヒリ語でも創作を開始すると述べている¹⁹」。また、1992年のインタビューにおいて、グギは自分で翻訳することに興味を失ったと発言した²⁰。

Decolonizing the Mind における言語観は次のように要約される。すなわち、1) 創作の言語は民族語であるべきである、2) 創作と翻訳では言語使用の意味が異なる、3) 異なる言語間の対話を生むために翻訳は重要である。1980年代のグギはこのような言語観で創作をし、翻訳をしていた。

次節では、本節で検討してきたグギの言語観が、*Wizard of the Crow* 発表前後に至るまでの約20年の間でどのように変化をしたのかを見てみよう。

2. *Globalectics* での言語観

Globalectics: Theory and the Politics of Knowing (以下、*Globalectics*)はグギの言語観の変遷をたどるのにつけてある。2012年に発表された同書は、2002年からグギが籍を置くカリフォルニア大学アーヴァイン校の International Center for Writing and Translation での研究が元となっている²¹。*Wizard of the Crow* の執筆が開始されたのが1997年からであるため、創作中の言語観が述べられている資料として参照することができる。

論旨を検討する前に、1980年代から2000年代にかけて、世界に起こった最も大きな変化のひとつを確認しておこう。それは、テクノロジーの発達である。特に90年代半ば以降は情報通信技術が飛躍的に発展し、インターネットの普及により、遠隔地にいる者同士が情報のやりとりを行うことが格段に容易となった。アフリカ諸国においては90年代後半から携帯電話の使用が急増し、それに伴う送金決済サービスの浸透などは Leapfrog 型の発展の例としてビジネス誌でもしばしば取りあげられている。これが、*Globalectics* が前提にしているものである。

なお、1982年からグギが亡命生活を続けていることも忘れてはならない。亡命した作家がどの言語を使用して創作活動をするのかは各人各様である²²。しかしながら、いずれもが母国の言語との距離の取り方に鋭敏になることを余儀なくされるようだ。近年では、亡命作家が自分の作品を自分で翻訳する傾向にあることが論じられている²³。

では論旨を追ってみよう。*Globalectics* において、グギは、テクノロジーの発達によって「世界文学」が可能になったと考える²⁴。このような考え方自体は珍しいものではない。2000年前後において、フランコ・モレッティやデイヴィッド・ダムロッシュ、またパスカル・カサノヴァらによって「世界文学」を再定義する試みがなされたのは記憶に新しい。2000年代に書かれた文学を論じるにあたって、テクノロジーの発達は欠かすことのできない所与の条件である。

「世界文学」を可能にするのはテクノロジーの発達だけではない。もうひとつの要件は翻訳である。テクノロジーの発達と翻訳により、文学は世界中で読まれ、語られうる。同書でグギは翻訳の重要性についてこう述べている。“Translation is the language of languages. It opens the gates of national and linguistic prisons. It is thus one of the most important allies of world literature and global consciousness.”²⁵ そして、翻訳を通じて語り直しが行われることによって、新しい物語は生まれつづける。“Even when listeners already know the general outline of a story and its ending, the master story teller is still able to recreate afresh the anxiety of expectation and then satisfy it. The story becomes new in every telling and retelling.”²⁶ これはダムロッシュによる「世界文学」の定義の一つであるところの「翻訳を通して豊かになる作品²⁷」と同じ発想だろう。

とはいえ「世界文学」は、しばしば西洋中心主義的な視座からのものになりがちである²⁸。そこでグギは「世界文学」よりも重要なこととして、世界をグローバレクティック (globalectic) に観ることを挙げている。この言葉は次のような意味をもつ。“Globelectics is derived from the shape of the globe. On its surface, there is no one center; any point is equally a center.”²⁹ これは、そもそも中心があることを前提にしないという意味において、1993 年のグギが考えていた「中心を移動させる³⁰」ことよりもラディカルである。グギが Marxism から Multiculturalism に変化したという指摘³¹も、この観点から説明をすることができるはずだ。すなわち、グギの考える「世界文学」は偏向をもたない。西洋世界を頂点とするヒエラルキーも、西洋世界以外がその頂点になりかわろうとするイデオロギーもないのだ。

グギはこのような状況下で生まれる文学を cyborature と呼ぶ³²。これは cyberspace と literature からの造語だ。グギがデリダを援用して語る史観によれば、ソクラテス以来の literature に対する orature の優位は、植民地支配の時代にはすっかり覆されてしまった。しかしながら世界中で話すように書かれ、書かれたものが語られるうちに orature と literature の境界は消失するのである³³。

以上が *Globelectics* で述べられていることである。テクノロジーと翻訳という手段、そしてグローバレクティックな視点が可能にする cyborature という名の「世界文学」と、彼の考える文学のあり方は要約されるだろう。

ここで私たちの指摘したい点は、*Wizard of the Crow* 発表前後において、グギは翻訳をより重視していたということである。前述のとおり、*Decolonizing the Mind* においても翻訳の重要性は語られていた。*Globelectics* でもそれは同様である。一方、*Globelectics* では、帝国主義の言語を用いず民族語で書くという耳目を集めた主張は後景化している。時代が進むにつれ、作品がさまざまな言語に翻訳されることの方により重きが置かれるようになっていくのだ。また、英語への翻訳もグギにとっては依然として否定されるものではない。2009 年の論考では、英語等の西洋言語はアフリカ諸言語間の翻訳を媒介するものとして評価が与えられている³⁴。

以上の検討を踏まえた上で、最後に議論の補助線として、「アスマラ宣言」を取りあげたい。なぜなら、その内容が *Globelectics* の論旨とほぼ一致をしていると考えられるからである。

「アスマラ宣言」は 2000 年に発表された。エリトリアで開催された “Against All Odds: African Languages and Literatures into the 21st Century” という国際会議の最終日のことである。この会議は「アフリカ大陸で開催された史上初の『アフリカ言語とアフリカ文学』に関する会議」であり、アフリカ大陸全土から、また世界中のディアスポラから、多くの作家や研究者が参加をした³⁵。会議中では、グギが自身の経験と言語観を披露し、参加者全員が耳を傾ける光景が見られたという³⁶。

宣言の第 4 項ではまさに翻訳と対話の重要性が述べられている。“4. Dialogue among African languages is essential: African languages must use the instrument of translation to advance communication among all people, including the disabled.” この項はグギも別のところで賛意を示すところである³⁷。また第 7 項では、テクノロジーの役割が示されている。“7. The effective and rapid development of science and technology in Africa depends on the use of African languages and modern technology must be used for the development of African languages.” そして宣言中では、帝国主義の言語を使用しないという主張は取りあげられていない。

グギがどの程度まで起草に関与しているかは判然としないため、「アスマラ宣言」はあくまでも傍証に留まる。ひとまず 2000 年において、アフリカに関わる多数の作家や研究者が *Globelectics* におけるグギと認識を共にしていたという点は特筆すべき点である³⁸。

3.過去の小説との比較

これまでに本論では、1980年代に書かれた論考と2000年代に書かれた論考をたどることによって、*Wizard of the Crow* が書かれた頃のグギは翻訳を重視するようになっていたことが確認された。では、グギは自分の作品を自分で翻訳をすることについて、どのような見解を持っているのだろうか。本節では、過去にグギが自身の手で翻訳をした作品と、自身の手で翻訳をしなかった作品を検討することで、それに迫りたい。表1(5ページ)でみたように、*Devil on the Cross* と *Matigari* が対象である。

Devil on the Cross は1980年に *Caitani Mũtharaba-Inĩ* という題で発表された、史上初のギクユ語長編小説である。ギクユ語版は驚異的な売上を示した。発行年度内に増刷を2回重ね、合計15,000部が刊行されたという³⁹。1982年にグギ自身による英訳が出版され、また同年には第三者によって行われたスワヒリ語訳 *Shetani Mslabani* も出版された。本章第1節で確認したように、*Shetani Mslabani* によってギクユ語とスワヒリ語との間に対話が生じたことを、グギは高く評価している。家庭の中で、またバスやタクシー、酒場等での朗読が行われ、民衆に広範な受容がされたという。

対する *Matigari* はどのような受容がされたか。こちらもベストセラーである。1986年に *Matigari Ma Njirũũngi* の題名でギクユ語版が発表され、翌年グギ以外の第三者によって英語に翻訳された。影響は大きく、架空の人物であるマティガリの現行犯逮捕を求めて警察が出動したという有名な話がある。これは権力の最盛期にあったモイの指令であるというのがグギの見解だ⁴⁰。ほどなくしてギクユ語版は禁書になり、店頭から姿を消した。

Matigari の評価で注目する点に、ギクユ語からの翻訳であることは忘れられ、あたかも英語作品のように読まれてしまった、というものがある⁴¹。すなわち、翻訳小説として読まれなかったということだ。これは翻訳者がそのような仕方で翻訳をしたためである。翻訳理論の概念を援用すれば、逐語翻訳ではなく、等価翻訳がなされたということだ。*Matigari Ma Njirũũngi* は *Matigari Ma Njirũũngi* として読まれ、*Matigari* は *Matigari* として読まれることになった。

これまで検討してきたとおり、グギが翻訳を重視するのは、それによって言語間のコミュニケーションが生じるからである。とすれば論理的な帰結として、それを促すような形での翻訳が望まれることになる。各言語内に作品を孤立させるような翻訳の仕方は避けなければならない。私たちはそこに、*Wizard of the Crow* をグギが他ならぬ自身の手で翻訳していることの意味を見いだすのである。

Wizard of the Crow の翻訳に関して、グギはどのように述べているだろうか。英訳出版から3年あまり後に書かれた“Translated by the author: My life in between languages”は、わずか4ページと短い、グギの言語観が凝縮された論考である。

そこにおいてグギは、*Weep not, Child* などの英語で書かれた作品は、Mental Translation だったと述べている⁴²。すなわち、グギは頭の中にあるギクユ語で書かれたオリジナルテキストから英語へと翻訳をしていたのである。グギにとって、英語による創作は、英語への翻訳であった。その意味において、ギクユ語による創作は、翻訳からは独立した行為であるとグギは言う⁴³。そしてギクユ語で書いたテキストを英語へ翻訳することは Mental Translation と等しい。違いはギクユ語のテキストが頭の中にあるか、実際に発表されているかということにしかない。いずれの場合も、ギクユ語のリズムや文章構造を保持することができるような翻訳をグギは試みたという。

次にグギは *Matigari* を回想する。その記述からは、*Matigari* の翻訳のされ方について評価をしているのかどうか判断するのは難しい。グギは言う。“In other words, readers could concentrate on their identification with the world of the novel without being tripped through the constant reminder that they were reading a translation.”⁴⁴ ここでは、ギクユ語の痕跡を残すようにした翻訳と対比する形

で、*Matigari* はギクユ語の痕跡を残さない翻訳によって読者を小説に集中させることができたと言われている。一見したところ、グギはそれを肯定しているようだ。

続けてグギは *Wizard of the Crow* の翻訳について語り始める。同書執筆の際には、ギクユ語での創作と英語での翻訳が並行して行われたことが述べられる。その点では、ギクユ語版が刊行されてから英訳がなされた *Devil on the Cross* とは、性格を異にする作業であったようだ。これは作者自らが翻訳を行うときに発生しうる事象である。必ずしも創作の後に翻訳が行われるとは限らないのだ⁴⁵。グギによれば、write、rewrite、translate、retranslate の相互作用が発生したのだという。*Wizard of the Crow* の翻訳はかぎりなく創作に近い行為であった⁴⁶。

最終的に、グギは以下のような結論に至る。“My one determination was that I would not try to make the source language intrude overtly in the target language. I was no longer interested in trying to make readers feel they were reading a text that had been written in another language.”⁴⁷ この記述は、*Wizard of the Crow* を翻訳小説として読むという私たちの試みを決して頓挫させない。グギは、*Devil on the Cross* と *Matigari* の翻訳のされ方を対比するところから論を進めている。グギは、*Devil on the Cross* のように、「常に (constant)」翻訳小説を読んでいると告げられるような形で翻訳がされることは望んでいない。読者が小説世界に集中する妨げになるからである。そのため、「あからさまな形で (overtly)」ギクユ語小説を英語小説に盛りこむことには関心を失ったと述べているのである。

私たちの目的は *Wizard of the Crow* を翻訳小説として読解することであった。グギは翻訳と感じさせない翻訳を評価する。一方で、*Matigari* のように、翻訳を通じての対話が生まれないことは望まない。もはや翻訳をする主体は誰でもよいというわけにはいかなかった。すなわち、グギに課せられたことは、読者を小説世界に集中させつつ、小説外世界に導くという離れ業である。ここに至り私たちの目的はこのように修正される。すなわち、翻訳小説としては一見読まれることのない小説を、翻訳小説として読む。これこそが私たちの明らかにしたいグギの翻訳の手法である。

なお、“Translated by the author: My life in between languages” では、帝国主義の言語を否定し民族語を使うという論点についてはほとんど触れられていない。自分自身による翻訳は創作に近接しうるものであるとすると、英語への翻訳は英語での創作を意味することとなる。これは創作の言語に英語を用いないという主張とはそぐわない。したがって、その主張は理論的に後退せざるをえないのである。

第2章 翻訳の手法

1. 翻訳を連想させるモチーフ

前章で明らかにされたのは、ギクユ語で創作をするということよりも、書かれた作品が諸言語に翻訳されることの方にグギが重きを置くようになったということである。翻訳によって、諸言語間に対話を生じさせることがグギの狙いだった。では、グギはその狙いを達成するために、*Wizard of the Crow* においてどのような手法を取っているのか。本章では二つの観点からそれが明らかにされる。翻訳を指示するものを物語に登場させること、そして翻訳されたものであることを示す形で翻訳をすること、である。

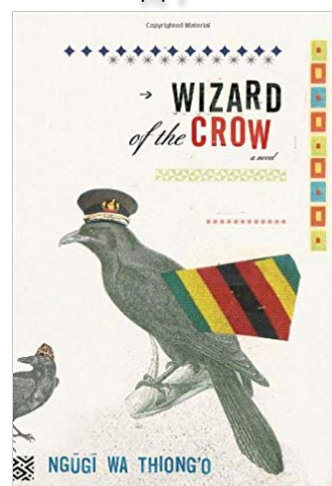
さらに強調されてしかるべき点は、上記の手法が暗示的に行われることである。歪な形で翻訳されたテキストを通じて読者の気を散らすことはグギの本意ではない。あくまでも「自然な」小説として読むことができるような形で翻訳はなされている。したがって、私たちが以下で行うことは、テキスト内に隠された翻訳の痕跡をたどる試みとなる。

まず、翻訳を指示するものとして、*Wizard of the Crow* には“A translation from Gikuyu by the author”という語句が明記されていることから論を始めよう。語句の挿入はグギの意図したものである¹。これは本作が著者の手によって翻訳されたものであることを明確に示す。しかし同時に留意しなければならない点は、この語句がエピグラフよりも前のページにある題名の下にひっそりと置かれていることだ。注意深い読書でなければ読みおとしてしまうにちがいない。これは、翻訳であることは明記しつつ、それを読者には気がつかせないようにするグギの配慮によるものである。

表紙のデザインにも重要な手がかりが隠されている。図1は英語版の表紙である。ギクユ語版とは表紙のデザインが異なることから、ここには著者の何らかの意図が表れていると考えたい。表紙にはカラスを思わせる鳥が二羽描かれている。どちらも帽子を被っており、中央にいる大きな一羽は羽の部分に、赤・黄・緑の汎アフリカ色をした図形が重ねられている。私たちの思い込みは、これをケニアの国旗であるかのように見せるだろう²。正しくは、ジンバブエの国旗である³。ジンバブエの国旗に描かれている鳥の彫刻が、帽子の中に小さく描かれていることからそれは明らかである。これは単なる「ひっかけ問題」ではない。なぜケニアの歴史を背景に持つ作品の表紙にジンバブエの国旗が描かれているか。ひとつには、本作で描かれていることがケニアのみならず他のアフリカ諸国にも当てはまるということを示すためだろう。しかしそれだけではない。ここで想起しておくべき点は、翻訳によってアフリカの諸言語間の対話が進むことをグギが望んでいたということだ。表紙において既に、ケニアとジンバブエの対話を暗示することをグギは試みている。このように、翻訳を示すモチーフは潜在しているのだ。

テキスト内においては、塔建設のプロジェクトが翻訳を示すもののひとつである。あらずじで見たように、*Wizard of the Crow* では、Rulerの誕生日を記念し、その威光を示す世界一の高さの塔を建設するというプロジェクトが外務大臣のMachokaliによって提案される。このプロジェクトは物語を駆動する装置のひとつである。塔の建設を担当する建設会社に雇用されたいがた

図1



出典:
Wizard of the Crow (Anchor, 2006)

めに大勢の求職者が列をなし、それが反政府組織のデモに利用されることが物語半ばにかけて描かれる。後半では、塔建設の資金援助を得るために Ruler が渡米する様子が描かれている。

本作において、この塔は「バベルの塔」にちなんで語られている⁴。言語論や翻訳研究の分野で「バベルの塔」の神話はしばしば象徴的に言及されるモチーフである⁵。「バベルの塔」という形容がされたことは、グギが言語や翻訳に関して読者の注意を喚起していることを示すいささか明白に過ぎる証左である。この物語は最初から最後まで言語や翻訳をめぐって書かれているのだ。「バベルの塔」を建設する計画は、Global Bank からの援助を得られず、実らない。これが示唆していることは、翻訳が今なお求められているということである。グギは言語による帝国主義を論じた別の論文において、英語やフランス語等の征服者の言語に支配される前の 19 世紀アフリカの言語状況のことを、「バベルの塔」になぞらえている⁶。すなわち、アフリカの諸言語間の対話を実現させる手段として翻訳は必要なのだ。

なお、作中において「バベルの塔」は、Tower of the Babel ではなく、House of the Babel というなじみのない言葉で表現されることがある⁷。後に似た論点に触れるが、この英訳の揺らぎ自体は、この小説が翻訳されたものであることを暗示する効果がある。翻訳が不要になった世界を表す「バベルの塔」自身の翻訳が揺らいでいることはいかにも示唆的ではなかろうか⁸。

翻訳を示すものの例として、次に「鏡」を見てみよう。

「カラスの妖術師」は治療を行う際に、鏡を用いる。小さな手鏡でも、全身が映るサイズの鏡でも良い。これに患者を映し、そこに映るものを患者に見せながら会話を行い、治療が行われる。会話を通じての施術は、アフリカの呪医による治療でしばしば見られるものだ⁹。しかし鏡を使用する治療は本作において特徴的であると思われる。

精神を映し出すものとして、鏡の比喻は文学作品においてしばしば用いられてきた。本作もその例外ではない。次のシーンは、「カラスの妖術師」と Tajirika との会話である。

“Then break the walls of these prisons with your mirror power.”

“I did not bring a mirror with me.”

“Oh!” groaned Tajirika in despair.

“What if we make our own mirror?” the Wizard of the Crow asked suddenly.

“How?”

“Our minds. Is there any mirror greater than the mirror of the mind?”¹⁰

ここではまさしく精神を映し出すものとして、鏡が言及されている。

鏡の本質は何かを映し出すことである。これには翻訳と似たところがある。一般的に翻訳とは、ある言語をある言語へと「等しく」移しかえることである。この点は、次のように言い換えることもできるのではないだろうか。すなわち、ある言語が、まるで鏡に映しだされるかのように翻訳される、というような表現だ。鏡と翻訳との間には概念上の親和性がある。デイヴィッド・ダムロッシュは原作を翻訳に持ちこむことを「神秘的な鏡映」と述べていた¹¹。 *Wizard of the Crow* において、鏡を媒介にして「カラスの妖術師」と患者の会話がなされることは、翻訳小説を媒介にして異なる言語同士の対話が行われることと同じ構造である。Mental Translation というように、グギにとって翻訳は頭の中で行われるものであることも想起されたい。

本作において鏡に映しだされるのはイメージだけではない。“The writing on the mirror”¹²という表現からもわかるように、文字が映しだされることもある。そして、人々の口にのぼるところでは、どうやら「カラスの妖術師」は鏡を「書物のように」読むことができるのだ¹³。また、次の場面を見てみよう。Ruler は Sikiokuu に Nyawira の居場所を訊ねる。Sikiokuu は、検索には「カラスの妖術師」の力を借りるつもりであるとして、このように答える。“Call him their interpreter. I ordered mirrors from Japan, Italy, Sweden, France, Germany, Britain, and the USA,”

Sikiokuu said with enthusiasm, as if the Ruler knew all about his scheme.”¹⁴ ここで Sikiokuu は、鏡を通じて患者の精神を読解する「カラスの妖術師」のことを「通訳」と呼んでいる¹⁵。また、Sikiokuu は「カラスの妖術師」が使用する鏡を世界中に注文している。諸外国から鏡を取りよせる行為は、諸外国の言語への翻訳を彷彿とさせる。これらの記述は、鏡が翻訳と重ねあわせられることを示すあからさまな例である。すなわち鏡は本作において翻訳の象徴として使用されているのだ。

最後の例として、感覚器官の改造を取りあげる。

Ruler への忠誠心を示すため、大臣たちは自らに整形手術を施している。Machokali は目を電球大に拡大し、夜間眠るときにもまぶたが閉じることはない。負けじと Sikiokuu は耳を改造し、ウサギよりも大きいものに变化させている。唇と舌を手術した大臣もいる。Ruler の敵を発見するため、人々の私的な会話を聞くため、また Ruler の名声を広く伝えるためという建前の元に、このような異常とも言える献身が行われた。

これらは戯画的に描かれているため、*Wizard of the Crow* が諷刺であることをいっそう強調する効果があるだろう。身体改造をダナ・ハラウェイの「サイボーグ」概念から分析した研究もある¹⁶。また、Machokali はイギリスで、Sikiokuu はフランスで手術をしたとされていることから、両者の対立を、イギリスとフランス、目と耳という別の形で読者に提示したものであることは容易に想像できる（なお、口の手術はドイツで行われた）。主人公の Kamiti の特徴のひとつは嗅覚が優れていることであり、また Nyawira の別れた夫の名字は Nose (鼻) であった。顔の部位が用いられることで、登場人物の関係性がわかりやすく表現されている。

私たちはこの改造を翻訳という観点から捉えなおしたい。目、耳、あるいは口の整形手術は、その外見の変化が目的とされたのではなく、それぞれの機能の向上が建前上必要とされたのだった。見る能力、聞く能力、そして話す能力である。これまで明らかにされたように、グギは翻訳が読まれることを通じて異なる言語間に対話が生まれることを望んでいた。見る能力は書物を読む能力、聞く能力や話す能力は対話を生じさせるために必要な能力ではないか。目と耳という二項対立は、翻訳をめぐる議論の中では、しばしばエクリチュールとパロールの対立として言及されるものだ¹⁷。全編を通じて描かれる Machokali や Sikiokuu のつばぜりあい、まさしく翻訳を暗示するものである。

本節では、*Wizard of the Crow* には翻訳を示すモチーフがいくつか登場していることが示された。これらは明瞭な形で読者に提示されてはいない。翻訳という観点から読むことで初めて明らかになるものである。同様の観点から、今度は翻訳のされ方について検討してみよう。だがその前に、翻訳に著者の意図が表れていることを前提にした分析ははたして妥当なのだろうか。私たちはここで分析の立場を明確にする必要があると思われる。次節では自己翻訳の研究を参照することでそのような異論に反論を加えておきたい。

2. 「自己翻訳」の研究

自己翻訳とは「作者が自分の作品を自分で翻訳すること」である¹⁸。*Wizard of the Crow* は作者グギが自分の作品 *Mūrogi wa Kagogo* を自分で翻訳したものであり、この定義に含まれる。自己翻訳に関する研究が注目されるようになったのは比較的最近のことだ。初めて体系的に自己翻訳を論じた *The Bilingual Text: History and Theory of Literary Self-Translation* は 2007 年に発表されたばかりであり、世界的に観ても新しい学問分野である¹⁹。アフリカ文学においては、自己翻訳に関する研究は主にフランス語圏の作家を対象に少しずつ進められている²⁰。個々の作家によって事例は異なるものの、それが政治的な抵抗と関わっているという議論がなされているようだ。

自己翻訳の研究はしばしば研究者たちを悩ませてきた。最初に書かれた作品と、後に自己翻訳をされた作品の二つの版が存在することになるため、どちらの作品を研究すれば良いのかという問題が必然的に発生してしまうからである²¹。私たちはこの揺らぎを問題とは捉えず、まさにこれこそがグギが翻訳をする意図であると論じてきた。ここで改めて、*Wizard of the Crow* 読解へのアプローチの仕方を、自己翻訳研究に照らしあわせ考察してみよう。いかに研究者は文学研究の「オリジナル」概念と折り合いをつけてきたのか。整理すると表 2 のようになる。なお、この表は秋草俊一郎によるウラジミール・ナボコフ研究についての整理を借用したものである²²。

表 2

自己翻訳研究の立場	<i>Wizard of the Crow</i> を研究する場合
1) バージョンアップ	英語版を研究
2) 二次創作	ギクユ語版を研究
3) 個々の価値	英語版は英語版で、ギクユ語版はギクユ語版で研究
4) 相互作用	英語版とギクユ語版を読み、相互作用を研究

まず、ごく簡単に、上記の表におけるそれぞれの立場について説明を加えておきたい。

1) バージョンアップ：この立場では、時系列として後に翻訳されたものが研究の対象とされる。それが改訂版として、最も作者の意図が現れているものと考えられている。

2) 二次創作：この立場では、最初に書かれたテキストが原典であり、後に翻訳されたものは二次的な創作にすぎないとみなされる。

3) 個々の価値：ある言語で書かれた作品は、その言語の文脈や環境の中でのみ理解されうるという立場である。

4) 相互作用：一方が他方の言語の文脈や環境の中で読まれうるという立場である。研究者には、最初に書かれたテキストと、自己翻訳されたテキストの両方の言語や文化に精通していることが求められる。

以上の区分に則れば、私たちの研究は 3) と 4) の中間にある。これまで私たちは英語版のみを研究の対象としてきた。しかしギクユ語版は無視されたのではない。翻訳小説としての読解を通じ、英語版とギクユ語版の対話という相互作用の可能性が常に探究されてきたのだ。ただし、私たちは必ずしも異同分析までが必要とは思えない。*Wizard of the Crow* におけるグギの意図に迫るには、ギクユ語、あるいはスワヒリ語の言語や文化への十全な理解はなくても良い。なぜなら元々そのような読者が想定されていないからである。むしろ、理解できないからこそ翻訳によって対話が生まれるとグギは考えている。多言語を解するコスモポリタンはグギにとって「理想的読者」ではない²³。

したがって私たちの研究では、英語以外の言語を理解することのできない読者の対話を促進させるために、グギが *Wizard of the Crow* をどのように自己翻訳しているかということに焦点があてられる。対話を促すためには必ずしもギクユ語を読解できる必要はなく、ギクユ語版の存在を示唆することさえできれば良い²⁴。これが私たちの目的である、翻訳小説として読解することである。

自己翻訳の研究では作者の意図が重視されることはいうまでもない。第三者によって翻訳された作品とは異なり、作者の思惑が強く反映されているということが研究の前提である。初歩的なところでは、他人に翻訳をさせないことも作者の意図のひとつとみなすことができる²⁵。こ

れにならい、私たちは *Wizard of the Crow* に隠されたグギの意図を明らかにすることを目的として考察を進めてきた。

以上のように、自己翻訳の研究を参照することで、私たちの研究の方向性がより明確になったと思われる。次節では、翻訳されたものであるという痕跡を残す形でグギが翻訳しているという点について検討しよう。

3. 翻訳であるという痕跡を残す翻訳

自己翻訳された小説には作者の意図が色濃く表れる。前章で見たように、グギは、読者に翻訳小説を読んでいると常に思わせるような翻訳のされ方は望んでいない。翻訳であることをほのめかす程度の水準がグギの目指すところである。では、読んでいてかすかな違和感を覚えるような箇所が *Wizard of the Crow* にはあるだろうか。

次の文章を見てみよう。これは Ruler が、彼の妻を叱責する場面である。

What were you before I made you my wife? he asked, and answered himself, A primary school teacher. I am the past and the present you have been and *I am your tomorrow take it or leave it*, he added in English as he turned his back on her.²⁶

英語を理解する読者であれば何ら問題はなく上記の文章を読むことができただろう。と同時に、ここに読みとばすことのできない何かを感じたにちがいない。注意したい点は、イタリックで書かれた文章が登場し、その後に「in English (英語で)」と添えられていることである。本作において、この組みあわせは幾度もみられる。

読書体験を再現してみよう。読者は上記引用に至るまで英語で書かれた文章を読んできた。登場人物の会話は英語で記述され、読者は登場人物たちが英語を用いて会話をしていたのだろうと思わされていた。しかし「in English (英語で)」という記述に出会うことによって、これまで自分が読んできた英語の文章が実は英語ではなかったということに気づかされることになる。これまで読んできた英語の文章が、すべて英語以外の文章に反転することになるのだ。エミリー・アプターの表現を借りれば、この体験は「自らを翻訳の中に見いだすという恐るべき予感²⁷」が現実化する瞬間である。

このイタリックの箇所は、*Mũrogi wa Kagogo* において、英語で書かれている部分である。ギクユ語で書かれている本文中に、英語での記述が挿入されている。そのような箇所を、グギは *Wizard of the Crow* に翻訳する際にイタリックにすることで表現した。そして、*Mũrogi wa Kagogo* においてギクユ語で「na Kingeretha (英語で)」と書かれていた箇所には、「in English (英語で)」という逐語訳が当てられている。*Mũrogi wa Kagogo* で英語が用いられていることから必然的にこのような不自然さが生じてしまう。ギクユ語版の中でスワヒリ語が用いられる場面もあるが、その場合には英語版においてそのままスワヒリ語を記述しても違和感はない²⁸。

ここで私たちが主張したいのは、グギはこのような表現を避けることもできたということだ。*Wizard of the Crow* は自己翻訳であり、*Mũrogi wa Kagogo* の創作と並行してその作業はなされた。グギは *Mũrogi wa Kagogo* を創作する際に、英語表現を使用しないことを選択することもできた。あるいは *Wizard of the Crow* を翻訳する際に逐語訳ではない形で処理をすることもできた。しかしグギはそれを選ばなかったわけだ。これを私たちは、翻訳であるという痕跡を残すというグギの意思の表れであると考え。読者が *Wizard of the Crow* の当該箇所を読み、*Mũrogi wa Kagogo* のことを多少なりとも想像すればグギの試みは成功である。

ギクユ語から英語への翻訳のされ方について、「korwo」に関するエピソードが本作最大の仕掛けである。冒頭 1 ページ目から、Ruler が病気となり、謎の言葉を唱えるようになったことが語られている。その音は “ka ke ki ko ku” と聞こえるらしい。

The illness, so claimed the first, was born of anger that once welled up inside him; and he was so conscious of the danger it posed to his well-being that he tried all he could to rid himself of it by belching after every meal, sometimes counting from one to ten, and other times chanting ka ke ki ko ku aloud. Why these particular syllables, nobody could tell.²⁹

この音の正体が明らかになるのは 500 ページ近くも後のことである。作中人物たちは Ruler のつぶやきを、“coral, crawl, cruel, or corwar³⁰” や、“cold war³¹” 等の英単語を意味するものであると推測している。しかしこれは、ギクユ語で「if」を意味する「korwo」を意味していた。そしてそれは、“*The sound he had been hearing was korwo, which means if.”³² という註の形で読者に示される³³。ka ke ki ko ku の音は、korwo の k の音と響くものである。

私たちが述べたいのは、この謎解きは *Wizard of the Crow* を読んでいる読者にしか理解されないということである。ギクユ語の読者にとっては、Ruler の言葉が「korwo」を意味していることは明白だからだ。物語の前半において、Tajirika が同様の症状を見せているからである。Tajirika は白人になりたいという自らの欲望を「if」から始まる言葉として取り憑かれたように呟いていた。しかしこの時点で英語版の読者には、「if」はギクユ語で「korwo」だという情報は与えられない。ようやく種明かしがされ、壮大な伏線に驚かされるという仕掛けである。そしてこれは、「翻訳」に対して読者の意識を開くという役割を果たしてもいるのだ。

作中では、口承文学の見地からも、翻訳であることを示す試みがされている。以下はあらすじでも見たように、Kamĩĩ と Nyawĩra が追っ手から逃れるために、初めて「カラスの妖術師」の名前を使用するところである。

He then took a felt pen from his bag and wrote on the cardboard in big letters: WARNING! THIS PROPERTY BELONGS TO A WIZARD WHOSE POWER BRINGS DOWN HAWKS AND CROWS FROM THE SKY. TOUCH THIS HOUSE AT YOUR PERIL. SGD. WIZARD OF THE CROW.³⁴

この記述は後、別の語り手から語りなおされる。語っているのは、追いかけていた張本人である警官の一人だ。

Approaching it, I saw some letters jump from the wall toward me: WARNING! THIS PROPERTY BELONGS TO THE WIZARD WHOSE POWER CAN BRING DOWN EVEN CROWS FROM THE SKY. TOUCH THIS DOOR AT YOUR PERIL. SGD. WIZARD OF THE CROW.³⁵

並べてみると明らかではあるが、先を急ぐ読者は読みとばしてしまうかもしれない。前者と後者の間では、幾つかの箇所では差異が生じている。語りなおされる際に、内容が少しずつ変化し、新しい物語が生まれていく。これこそが口承文学の特徴とするところであり、またグギが翻訳を通じて生まれると考える新しい文学なのである。

本節の最後に取りあげたい点は、三人称の人称代名詞の横に固有名詞が添えられる表記方法である。これは *Wizard of the Crow* の文体としての特徴だ。グギの他の小説ではこの種の用法はほとんど目立たない³⁶。私たちはこれを、翻訳を示唆するためのものであると考える。それによ

って、読者は自分が読んでいるテキストが翻訳されたものであるという可能性に気づかされるからである。

“Yes, I see,” Nyawīra said, a little tired of the talk of sorcery. “What you now need is a good witch doctor,” Nyawīra added, in part to shock the good Christian, but it was she, Nyawīra, who was shocked by Vinjinia’s impassivity.³⁷ (下線部は筆者による)

But he remained on his knees as he reminded His Holiness about the mirrors he, Sikiokuu, had once ordered from abroad.³⁸ (下線は筆者による)

Wizard of the Crow では、he や she の人称代名詞の後に、当該人物の名前が書かれることがある。数えただけで、およそ 20 箇所はこの種の表現を見つけることができた³⁹。これはいわゆる同格表現 (apposition) というものである。補足的な説明をすることを目的に、名詞と名詞 (節) などが並列して記述される。

複数の登場人物がいる場合に、人称代名詞が誰を指しているのかを特定するために、この種の表現がなされているのかもしれない。たとえば複数の男性が会話をしている中で、「he」が誰のことか判別できなくなるというような経験は小説の読者ならば少なからずあるはずだ。しかし、当該表現の箇所では、かならずしも同性の登場人物が描かれているわけではない。人が多くいたとしても、文脈から誰かを推測することはたやすい。このような表現がなくても、人称代名詞が指すものの混乱は起こらないだろう。

あるいは、語調を整えるためにこの種の表現が選ばれているのかもしれない。読点によって読者の読むリズムは形づくられる。口承文学として音読されることが期待されているならば、なおさらこの種の調整が要請されるだろう。この回答は否定されない。作家の腕の見せどころであり、審美的な議論の範疇になる。

ここで強調したい点は、上記引用において、人称代名詞あるいは固有名詞のどちらかが欠けていても問題がないということである。文法的にはもちろん、読みすすめていくにあたっても何ら支障はない。他の該当箇所でもそれは同じである。であるならば、かならずしも必要ではないと言ってしまえるような記述をグギがしていることに、何らかの意図を読むこともできるだろう。私たちはそれを、翻訳であることを示すことだ、と考える。このような表現方法に出会った読者は多少なりとも違和感を惹起される。そしてそんな表現がされた理由に思いを巡らせる。英語版のみを読んでいるだけでは、回答を導くことが難しいと考えるかもしれない。もしかすると、私たちの読んでいるものは翻訳されたものであるのか？ 作者は翻訳の際に人名を挿入することで、人物を特定しやすくし、あるいは読書のリズムをコントロールし、リーダビリティの向上を図ったのか？ このように読者の思考を「翻訳」に導くことを可能にしているのが、グギの翻訳である。

本節では、翻訳小説であることを告げるグギのメッセージの幾つかが、翻訳のされ方に注目することで示された。第一節では、翻訳を暗示するモチーフの数々が明らかにされた。これらを *Wizard of the Crow* に隠すことができたのは、グギが自己翻訳をしているからである。かりに第三者が翻訳していたならば、語りなおされたときの語句の差異や特徴的な同格の使用法などはこのような形では表れえなかったにちがいない。*Wizard of the Crow* の場合はギクユ語での創作と英語への翻訳が並行して行われたことにも留意が必要である。そうであるからこそ、翻訳を示すモチーフがあらかじめ *Mūrogi wa Kagogo* に書かれえたのだ。

第3章 対話を加速させる手法

1. ポストコロニアリズムと翻訳

これまで私たちは *Wizard of the Crow* を翻訳小説として読みすすめてきた。翻訳を示唆するモチーフや、翻訳されたものであることを示す翻訳のされ方とともに、背後にひそむギクユ語版の存在が明らかにされてきた。第1章で確認したとおり、グギの思想において、翻訳とは対話を生じさせるための手法だった。では、その対話を加速させるために、グギはどのような試みをしているのだろうか。私たちはそれを、西洋小説のふりをするものであると考える。それによって、*Wizard of the Crow* が翻訳されたものであるということがより際立って見えるからだ。

そのことは、ポストコロニアリズムを参照すると理解しやすいだろう。翻訳研究とポストコロニアリズムは言語の問題を扱うという点で共通している。翻訳研究を紹介する書籍の中ではしばしば、ポストコロニアリズムやそこで問題とされる「文化翻訳」について章が割かれている¹。なお、ポストコロニアリズムの定義は論者によってさまざまである²。本論ではそこには踏みこまない。

ポストコロニアリズムにおいては、そもそも小説という形式自体が西洋由来のものであることに着目した研究がなされてきた。アフリカの作家が小説を書くときには、多くの場合、西洋小説の形式が選択される。このような作家の選択には賛否両論があるが、ポストコロニアリズムの主張はそれらの考え方とは異なるものである。まず、批判する者の考え方とは以下のようなものである。マーティン・タッカーいわく、「アフリカの作家たちはヨーロッパの手本を攻撃するときですら、ヨーロッパの手本に従っている³」。1980年代のグギも同様で、この種の妥協には批判的であった。一方、あくまでもそれは過渡的なものだとして擁護する向きもある。ヤンハインツ・ヤーンは言う。「おそらく作家たちは、はじめのうちは、ヨーロッパの雛形にしたがい、討論によって力量を身につけるだろう。だが、一作ごとに、かれらのたいていは、ますます大きな度合いで、アフリカ伝統を取り入れている」⁴。ポストコロニアリズムでは、あえて、自覚的に、小説という形式が選択されたのだと論じられる。それは、西洋文学をポストコロニアルの観点から書き換える政治的な試みである⁵。いわゆる「キャノンの書き換え」だ。グギもこれを企てているのだろう。これまでになされた *Wizard of the Crow* の研究では、諷刺小説を筆頭に、さまざまなジャンル小説の系譜に作品を位置づける試みがなされてきた。私たちの考えでは、それは逆である。むしろこれらの西洋小説の系譜が連想されやすいようにグギは書いたのだ。

ここで私たちが強調したい点は、*Wizard of the Crow* が西洋小説の形式に従って書かれていれば書かれているほど、ギクユ語版の痕跡が明らかにされたときの効果が強いということである。第2章で詳述されたように、読者は幾つかの手がかりから *Wizard of the Crow* が翻訳小説であると気づくことができる。そして、これほどまでに西洋小説を装っていた小説が、実はギクユ語から翻訳されたものであるとはどういうことなのかと、読者は自問をすることになる。この際に生じる落差がグギの狙いである。読者は考察を強いられる。なぜギクユ語読者に宛てて書かれた小説に、ミス・ハヴィシヤムのような登場人物がいるのか⁶？ なぜ作品中でマザーグースの替え歌が歌われているのか⁷？ このとき既に対話は始まっているのだ。

提示された論点は二つである。西洋小説の枠組みを使用することは、西洋世界をそれ以外の世界の価値観によって書き換える政治的な試みである。一方、それは翻訳による諸言語間の対話を促進する起爆剤にもなる。すなわち、*Wizard of the Crow* では単にギクユ語世界の優位性が示されているのではない。翻訳小説であることが強調されることによって、ギクユ語世界との対話が同時に開かれているのだ。

その意味において、ユートピア小説という観点は特に考察されてしかるべきである。ユートピア小説自体が、他の物語からの借り物であるという側面が強いからである。「空想旅行記、旅行実録、対話編、風刺文学、哲学小説、冒険小説、ゴシック・ロマン、空想科学物⁸」という様々なジャンルがユートピア小説の伝統にはある。また、最も重要な点として、多くのユートピア小説が言語の問題を扱ってきたことは想起する必要がある。ユートピア小説において描かれる世界では、しばしば単一の言語のみが使用されている。それは普遍言語運動のユートピアとして、あるいは独裁的な権力のディストピアとして、作中に採用されているものだ。西洋小説を読み慣れている読者であれば、ユートピア小説の枠組みで *Wizard of the Crow* が書かれていることから、言語の使用がテーマのひとつになっていることに気づくことができるだろう。これは第2章で触れた翻訳を示唆するモチーフとも関連する論点である。

大航海時代以来、西洋諸国によってアフリカ大陸はユートピアと捉えられてきた。また暗黒大陸というように、ディストピアとしても名指されてきた。それらの表象が、ユートピア小説の中ではしばしば描かれている⁹。アフリカ自身がアフリカのことをユートピアとして捉えることも多い。反植民地主義闘争や独立後に目指されたアフリカ社会主義とユートピア思想には親和性がある¹⁰。これまでもそれを主題に様々なポストコロニアル文学が書かれてきた¹¹。イマニニエル・ウォーラーステインの『ユートピスティクス』がケニヤッタやモイが好んで使用したハランベという言葉で終わるのは決して偶然ではないのだ¹²。

このように多くの意味が投影されたユートピア小説の枠組みで *Wizard of the Crow* は書かれている。読者は自分の読んでいる作品が翻訳されたものであることに気づき、そしてユートピア小説に思いを馳せ、その意味の深刻さに衝撃を隠せないだろう。

2. 小説の枠組みを意識させる手法

前節では、西洋小説の枠組みでギクユ語小説が書かれていることは、英語とギクユ語との対話促進に貢献するものであることが示された。本節では、そのような枠組みを読者に気がつかせるためにグギが取った手法が論じられる。

英語世界とギクユ語世界の両義性を持つ題材を作中に登場させることはそのひとつである。登場人物の名前を見てみよう。たとえば Kamĩtĩ。これは Kamĩtĩ wa Karĩmĩri というギクユ語の名前である。一方で、Kamĩtĩ は Comet という西洋風の名前も持つことが本文中で述べられている¹³。さらに、グギの経歴を知るものであれば、グギが拘禁された刑務所の名称が Kamĩtĩ prison であることをすぐに思い出すだろう。そのことから、Kamĩtĩ という名前は抑圧的な植民地時代および新植民地時代のケニアを象徴するのだと論ずる者もいる¹⁴。また、「comet (隕石)」という意味から、西洋的なジャンル小説の一つである Sci-Fi の系譜に接続する論者もいる¹⁵。このような両義性によって、読者は英語世界とギクユ語世界を意識し、*Wizard of the Crow* ではない世界の可能性に導かれるのだ。

西洋小説的な枠組みに読者の意識を向けるにあたって、次の台詞は非常に重要である。この一文には三重の意味が秘められている。Nyawĩra が読んでいる本について、Kamĩtĩ が質問する場面である。“Is that what you got from that novel you were reading, *Shetani Msalabani, Satan on the Cross* — or is it *Devil on the Cross*?”¹⁶

まず、作中人物が実在する小説を読んでいることで、読者は現実世界と小説世界の境界を強く意識させられる。自分が読んでいるものが小説であることに気づかされるのだ。小説内世界から離れ、俯瞰的に小説を眺める。ここから *Mũrogi wa Kagogo* までの距離はそう遠くない。読者は *Wizard of the Crow* ではない世界を想像しやすくなるだろう。別のシーンでは、アフリカやインドの女性作家¹⁷やエイモス・チュツオーラの『やし酒飲み』¹⁸への言及がある。これも同じ

く、小説という枠を意識させるという働きがあると考えることができる。「作中作」の手法もそうだ。たとえば Nyawĩra が子供たちへ童話の読み聞かせを行う場面はそのひとつである¹⁹。この手法は *Matigari* で実験済みであり、「読者にフィクションを読んでいるという事実を意識させる²⁰」のに一定の効果を挙げたという評価があった。

次に、グギが過去に発表した作品を読んでいることで、読者は *Wizard of the Crow* の世界と過去の長編小説の世界を連結させられることになる。これに関しては、*Wizard of the Crow* が *Devil on the Cross* のリライトであることを象徴していると論じる者もいれば²¹、*Devil on the Cross* に登場する Wariinga を Nyawĩra に接続させるものだと論じる者もいる²²。私たちは、このような「楽屋落ち」の記述は、読者を小説の外の世界に導く効果があると考ええる。

最後に私たちが強調したい点は、これによって翻訳の可能性が強調されるということである。これは第2章の論点とも関連するところだ。*Shetani Msalabani* は *Caitaani Mũtharaba-Inĩ* のスワヒリ語翻訳である。私たちは既に *Shetani Msalabani* が *Devil on the Cross* という題名で自己翻訳されたことを知ってしまっている。しかし、この場面は私たちに、*Shetani Msalabani* が *Satan on the Cross* とも翻訳されうることを教えてくれる。Kamĩtĩ の台詞には、ギクユ語やスワヒリ語の世界、英語の世界との翻訳による対話の可能性が秘められているのだ。

なお、*Wizard of the Crow* では、Kamĩtĩ の体外離脱体験が描写されている²³。肉体から魂が抜けだし、「bird's eye」でアブレリア自由共和国の東西南北を眺める。これが読者の視点をも俯瞰的にさせる役割を果たしていることは言うまでもない。

終章 翻訳の政治性

1. 翻訳の政治性

序章で確認した通り、グギは生涯に渡り、創作活動を通じて政治と向きあってきた作家だった。使用する言語と政治との関連性にはきわめて意識的である。帝国主義の言語を使わず、民族語のみで創作をするという宣言は文学に携わる者に今なお強い影響を及ぼしている。私たちが第 1 章で確認したのはさらにその先である。グギが企図しているのは、民族語で書かれた小説が世界中に翻訳され、諸言語の間に対話を生じさせることであった。

私たちが明らかにしてきたのは、*Wizard of the Crow* にグギのその思想がどのように表れているかということである。本論ではそれを、翻訳小説として読解する、と表現してきた。第 2 章では作品中に登場する翻訳を暗示するモチーフや、翻訳であるという痕跡を残す形での翻訳が示された。第 3 章では、翻訳によって生じた対話を加速させるための手法が分析され、前章までの翻訳をめぐる議論が補強されることが示された。

このような作品分析と並行して確認されたことは *Wizard of the Crow* という作品の持つ政治的な側面である。諷刺として、ケニアやアフリカ諸国の現実政治を批判しているという点は言うまでもない。もとより政治的な主張が含まれる小説ではある。しかし、それだけではない。私たちが確認してきたのは、翻訳という行為が持つ政治性である。第 1 章では、グローバルな観点からの「世界文学」をグギが想定していることが述べられた。グギによれば、西洋中心的不是な「世界文学」を形成するために必要とされるもののひとつが翻訳である。つまり翻訳という行為は、西洋中心的な「世界文学」を無化するための政治的な営みなのだ。アフリカの作家たちは政治的な抵抗として自己翻訳を行うことがあったという。ポストコロニアリズムが教えるところでは、翻訳という行為と政治的な抵抗には密接な関わりがある。あるいは、第三世界の作家たちは、西洋文学を書き換えるためにあえて西洋文学の様式を選択することがあったという。このように、*Wizard of the Crow* という作品においては、翻訳という行為が政治的な意味合いを持って表れているのである。

以上が本研究で明らかにされたことである。さて、ではグギのこの試みはどのように読者に受け入れられたのだろうか。すなわち、翻訳によって対話は促されたのか。これまで私たちが分析をしてきたのはグギの目的と手法であり、それによってもたらされた結果ではなかった。次節ではそれを概観し、本研究を終えることとしよう。

2. 今後の研究の展望

Wizard of the Crow を翻訳小説として読むという私たちの研究により、諸言語間の対話を促すというグギの意図や、作中において翻訳を示唆する手法等は明らかにされた。これは、グギの理論が、*Wizard of the Crow* の中にどのように表れているかを明らかにしたということである。あるいは、テキストから遡ってグギの思想を導いたのだ、ともいえる。前節で総括したように、その意味において、本研究の目的は達成されたといえるだろう。

私たちが明らかにしえなかった点は、はたしてそれが実を結んだのかどうかということである。すなわち、翻訳は促されたのか。諸言語間の対話は促進されたのか。そして、それによって政治的な抵抗が一定の効果を挙げたのか。これは本研究の射程を既に超えている。私たちは、*Wizard of the Crow* やその他のテキストの読解を通じて、グギの理論とその実践を明らかにすることを目的としていた。それが現実世界において、実際にどのような効果をもたらしたかについては、そもそも研究の対象としていない。

したがって次のようなものが今後の研究として企図される。たとえばフィールドワークである。書籍の流通や翻訳に携わる人間に聞き取り調査を行うことで、*Wizard of the Crow* の受容のされ方や翻訳についての証言を収集する¹。あるいは、実際に *Mürogi wa Kagogo* や *Wizard of the Crow* が朗読され、翻訳されていく様を観察する実地調査を行う。このような調査によって本研究の結論が新たな視点から検討されるにちがいない。

書誌的な事実として、*Wizard of the Crow* は既に多くの言語に翻訳がされている。2004 年から 2006 年にかけて、*Mürogi wa Kagogo* がギクユ語で書かれた。そしてほぼ同時期に自己翻訳がされ、2006 年に *Wizard of the Crow* が出版された。インターネットで検索したかぎりの情報であるが、2007 年には *Variksen Velho* としてフィンランド語版が出された²。翌年には外国語の小説に与えられるフィンランドの文学賞である Tähtifantasia Award を受賞している³。2008 年には *El brujo del cuervo* としてスペイン語版⁴、2011 年には *Herr der Kraehen* としてドイツ語版⁵、2014 年には *Djävulen på korset* としてスウェーデン語版が出版された⁶。アフリカの諸言語への翻訳がなされたのかどうかは、現在のところ、不明である。

このように多くの翻訳出版がされていることをもって、ある程度グギの試みは成功したと言ってよいのかもしれない。あるいは、*Wizard of the Crow* に関する研究が日々蓄積されていることすら、その裏付けのひとつとすることができるのかもしれない。してみれば、本論自体が、ひとつの対話であり、翻訳であった。2007 年にケニア人の小説家が英語に翻訳した小説が、およそ 10 年の時を経てギクユ語を解さない日本人の元に届き、本論のような考察を行うことになった。それこそがグギの試みの成功を示すほかならぬ証左であるように思えてならない。

2018 年 6 月のある記事は、グギがギクユ語小説の新作を発表することを告げている⁷。記事によれば、90 日以内の出版が予定されているとのことである⁸。同記事には、出版社の CEO へのインタビューが含まれているものの、*Wizard of the Crow* とは異なり、どうやら英語翻訳はしばらく出版されないようだ。グギが自己翻訳を行うのかどうかも現在のところ不明である。

しかしながら、本研究を終えた私たちは、この新しいギクユ語小説もいつの日か英語に翻訳されることを知っている。そして、それがグギ自身の手によってなされるだろうことを知っている。そこから多くの対話が生まれるだろうことを既に知っているのだ。

注

序章

- ¹ グギの経歴は、宮本正興『評伝 グギ・ワ・ジオンゴ＝修羅の作家：現代アフリカ文学の道標』（第三書館，2014）Simon Gikandi, *Ngugi wa Thiong'o* (Cambridge UP, 2000) 等を参照した。
- ² 逮捕の理由は明らかにされていない。*Petals of Blood* とギクユ語演劇 *I will marry when I want* の上演活動が原因だとされている。宮本正興『評伝 グギ・ワ・ジオンゴ＝修羅の作家：現代アフリカ文学の道標』（第三書館，2014）p.293.
- ³ Maya Jaggi, "The Outsider: an Interview with Ngũgĩ wa Thiong'o," *The Guardian*, 2006, Retrieved 20 May 2010.
- ⁴ グギ・ワ・ジオンゴ『一粒の麦』小林信次郎訳（門土社，1981），p. 405. 訳者あとがき
- ⁵ グギ・ワ・ジオンゴ『アフリカ人はこう考える』アフリカ文学研究会訳，宮本正興編（第三書館，1985），p. 98.
- ⁶ 本論では、*Mũrogi wa Kagogo* と表記された場合はギクユ語版を、*Wizard of the Crow* と表記された場合は英語版を指す。他の作品についても同様である。
- ⁷ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 768.
- ⁸ *Ibid.*, pp. 230-237.
- ⁹ Brady Smith, "Wizards, Superwonders, and a Fictional African State: Money and the Ecology of the Grotesque in Ngũgĩ wa Thiong'o's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 46(3) (Indiana UP, 2015), p.185.
- ¹⁰ 「翻訳」には、分野名、翻訳されたテキスト、翻訳を生み出す行為等いくつかの意味が含まれる。ジェレミー・マンディ『翻訳論入門』鳥飼玖美子訳（みすず書房，2009），p. 6. 本論では必要に応じて、翻訳小説、翻訳行為という言葉に代えた。
- ¹¹ 宮本正興『評伝 グギ・ワ・ジオンゴ＝修羅の作家：現代アフリカ文学の道標』（第三書館，2014）、Simon Gikandi, "The Postcolonial Wizard," *Transition*, 98 (Indiana UP, 2008)、Gĩchingiri Ndĩgĩrĩgĩ, "Character Names and Types in Ngũgĩ wa Thiong'o's *Devil on the Cross* and *Wizard of the Crow*," *Ufahamu: A Journal of African Studies*, 38 (3) (James S. Coleman African Studies Center, UCLA, 2015) など。
- ¹² Gĩchingiri Ndĩgĩrĩgĩ, "Character Names and Types in Ngũgĩ wa Thiong'o's *Devil on the Cross* and *Wizard of the Crow*," *Ufahamu: A Journal of African Studies*, 38 (3) (James S. Coleman African Studies Center, UCLA, 2015) など。
- ¹³ 北島義信「インド、パキスタン、アフリカ文学における「土着」と「近代」：ハニフ・クレイシ、モーシン・ハミード、グギ・ワ・ジオンゴを中心に」『土着と近代：グローバルの大洋を行く英語圏文学』（音羽書房鶴見書店，2015）、宮本正興『評伝 グギ・ワ・ジオンゴ＝修羅の作家：現代アフリカ文学の道標』（第三書館，2014）、Amitayu Chakraborty, "Modes of Resistance in Ngugi wa Thiong'o's *Wizard of the Crow*," *Interdisciplinary Studies in Humanities*, 4(2) (Rupkatha Journal, 2012), Simon Gikandi, "The Postcolonial Wizard," *Transition*, 98 (Indiana UP, 2008), Gĩchingiri Ndĩgĩrĩgĩ, "Character Names and Types in Ngũgĩ wa Thiong'o's *Devil on the Cross* and *Wizard of the Crow*," *Ufahamu: A Journal of African Studies*, 38 (3) (James S. Coleman African Studies Center, UCLA, 2015) など。
- ¹⁴ 松田素二ほか編『ケニアを知るための55章』（明石書店，2012），p. 222.
- ¹⁵ 宮本正興『評伝 グギ・ワ・ジオンゴ＝修羅の作家：現代アフリカ文学の道標』（第三書館，2014）、Simon Gikandi, "The Postcolonial Wizard," *Transition*, 98 (Indiana UP, 2008), Robert L. Colson, "Arresting Time, Resisting Arrest: Narrative Time and the African Dictator in Ngũgĩ wa Thiong'o's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 42(1) (Indiana UP, 2011), Michael K. Walonen, "Power, Patriarchy, and Postcolonial Nationalism in the African Dictator Novel," *Journal of the African Literature Association*, 6(1) (Routledge, 2011)等。グギはマジック・リアリズムという評価を歓迎していない。Simon Gikandi, "The Postcolonial Wizard," *Transition*, 98 (Indiana UP, 2008), p. 160.
- ¹⁶ Ian P. MacDonald, "The Cybogue Manifesto: Time, Utopia, and Globality in Ngũgĩ's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 47(1) (Indiana UP, 2016)
- ¹⁷ Simon Gikandi, "The Postcolonial Wizard," *Transition*, 98 (Indiana UP, 2008), Ian P. MacDonald, "The Cybogue Manifesto: Time, Utopia, and Globality in Ngũgĩ's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 47(1) (Indiana UP, 2016) 等。アフリカ文学と Sci-Fi の親和性は近年 Afrofuturism の文脈で論じられている。
- ¹⁸ Amitayu Chakraborty, "Modes of Resistance in Ngugi wa Thiong'o's *Wizard of the Crow*," *Interdisciplinary Studies in Humanities*, 4(2) (Rupkatha Journal, 2012)
- ¹⁹ Raoul J. Granqvist, "Ngugi wa Thiong'o in/and 2006," *Research in African Literatures*, 42(4) (Indiana UP, 2011), Gĩchingiri Ndĩgĩrĩgĩ, "Character Names and Types in Ngũgĩ wa Thiong'o's *Devil on the Cross* and *Wizard of the Crow*," *Ufahamu: A Journal of African Studies*, 38 (3) (James S. Coleman African Studies Center, UCLA, 2015) など。
- ²⁰ Simon Gikandi, "The Postcolonial Wizard," *Transition*, 98 (Indiana UP, 2008) など。
- ²¹ Ian P. MacDonald, "The Cybogue Manifesto: Time, Utopia, and Globality in Ngũgĩ's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 47(1) (Indiana UP, 2016)
- ²² Maria Alice Gonçalves Antunes, "Self Translation and Exile: A Study of the case of Ngũgĩ wa Thiong'o and Ariel Dorfman," *Cadernos de Tradução*, 38(1) (Universidade Federal de Santa Catarina, 2018), Elena Bandin Fuertes, "The Role of Self-Translation in the Decolonisation Process of African Countries," *Estudios Humanísticos, Filología* (Universidad de León, 2004), Raoul J. Granqvist, "Ngugi wa Thiong'o in/and 2006," *Research in African Literatures*, 42(4) (Indiana UP, 2011) など。
- ²³ グーグルブックス上で部分的に公開はされている。

²⁴ とはいえ、他のアフリカ文学作家と比較しても、グギは日本では知られている部類に入る作家である。著作の多くが日本語に翻訳されている他、グギを日本に招いてシンポジウムが開催される等交流も多く、日本のアフリカ研究者の尽力は高く評価されてしかるべきである。

第1章

¹ 批評家はナイジェリアのコレ・オモトショ。グギがギクユ語で執筆を開始したことを、ウォレ・ショインカとナギブ・マフフーズのノーベル文学賞受賞に並ぶ出来事としている。宮本正興『文化の解放と対話: アフリカ地域研究への言語文化論的アプローチ』(第三書館, 2002), p. 254.

² グギのアフリカ語への関心の高まりは、作品中のスワヒリ語やギクユ語の使用頻度の増加にも現れている。*Petals of Blood* について、以下の指摘がある。「スワヒリ語やギクユ語は前の作品群より多用され、回想シーンも多くなっている。これらはグギ文学の一つの特徴と言えよう。」コズモ・ピーターサ、ドナルド・マンロ編『アフリカ文学の世界《増補改訂版》: アフリカ文学における抗議と闘争』小林信次郎訳(南雲堂, 1983), p. 289.

付録

³ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonizing the Mind: The Politics of Language in African Literature* (James Currey, 1986), p. 13.

⁴ *Ibid.*, p. 16.

⁵ *Ibid.*, p. 8.

⁶ *Ibid.*, p. 22.

⁷ William Slaymaker, "The Disaffections of Postcolonial Affiliations: Critical Communities and the Linguistic Liberation of Ngũgĩ wa Thiong'o," *symplokē*, 7(1-2) (University of Nebraska Press, 1999), pp. 189-191. 同論文では、第三世界の作家の矛盾は許容することが必要だとする Brian Carraher の説も紹介されている(*ibid.*: 195).

⁸ ビル・アッシュクロフトほか『ポストコロニアル事典』木村公一ほか訳(南雲堂, 2008), p. 39.

⁹ Raul J. Granqvist, "Ngũgĩ wa Thiong'o in/and 2006," *Research in African Literatures*, 42(4) (Indiana UP, 2011), pp. 128-129.

¹⁰ グギはいくつかの戯曲や絵本等もギクユ語で発表している。

¹¹ グギ・ワ・ジオンゴ『アフリカ人はこう考える』アフリカ文学研究会訳、宮本正興編(第三書館, 1985), p. 69.

¹² 宮本正興『文化の解放と対話: アフリカ地域研究への言語文化論的アプローチ』(第三書館, 2002), p. 259-260.

¹³ 英語で書かれたアフリカ文学にしばしばくだされる見解である。アルムート・ノルトマン=ザイラー『新しいアフリカの文学』松田忠徳訳(白水社, 1978), p. 64.

¹⁴ 土屋哲『現代アフリカ文学案内』(新潮選書, 1994), p. 142.

¹⁵ 宮本正興『評伝 グギ・ワ・ジオンゴ=修羅の作家: 現代アフリカ文学の道標』(第三書館, 2014), pp. 294, 299-30. 中止された演劇活動については楠瀬佳子「付録 グギ・ワ・ジオンゴ『母よ、我がために歌え』」『南アフリカを読む: 文学・女性・社会』(第三書館, 1994) に詳しい。

¹⁶ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonizing the Mind: The Politics of Language in African Literature* (James Currey, 1986), p. 84

¹⁷ グギはスワヒリ語等のリンガフランカが民族語を圧迫することの危険性については注意を払っていない Ngũgĩ wa Thiong'o, *Moving the Centre: The Struggle for Cultural Freedoms* (James Currey, 1993), pp. 40-41.

¹⁸ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Decolonizing the Mind: The Politics of Language in African Literature* (James Currey, 1986), p. 85.

¹⁹ 宮本正興『文学から見たアフリカ』(第三書館, 1989), p. 103

²⁰ Feroza Jussawalla and Reed Way Dasenbrock, ed. "Ngũgĩ wa Thiong'o," *In: Interviews with writers of the Post-Colonial world*, (UP of Mississippi, 1992), p. 34.

²¹ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Globalectics, Theory and the Politics of Knowing* (Columbia UP, 2012), p. x-xi

²² John Glad (ed), *Literature in Exile* (Duke University Press Books, 1990) に詳しい。また、Gikandi はグギの亡命生活を英語での評論活動と結びつけている。Simon Gikandi, "Traveling Theory: Ngũgĩ's Return to English," *Research in African Literatures*, 31(2) (Indiana UP, 2000), p. 196.

²³ Maria Alice Gonçalves Antunes, "Self Translation and Exile: A Study of the case of Ngũgĩ wa Thiong'o and Ariel Dorfman," *Cadernos de Tradução*, 38(1) (Universidade Federal de Santa Catarina, 2018)

²⁴ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Globalectics: Theory and the Politics of Knowing* (Columbia UP, 2012), p. 46-47.

²⁵ *Ibid.*, pp. 60-61.

²⁶ *Ibid.*, p. 79.

²⁷ デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』秋草俊一郎ほか訳(国書刊行会, 2011), p. 432.

²⁸ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Globalectics: Theory and the Politics of Knowing* (Columbia UP, 2012), p. 48.

²⁹ *Ibid.*, p. 8.

³⁰ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Moving the Centre: The Struggle for Cultural Freedoms*, James Currey, 1993.

³¹ Simon Gikandi, "Traveling Theory: Ngũgĩ's Return to English," *Research in African Literatures*, 31(2) (Indiana UP, 2000)

³² orature と cyberspace の関係については、1998 年の時点で既に論じられている。Ngũgĩ wa Thiong'o, *Penpoints, Gunpoints and Dreams: Towards a Critical Theory of the Arts and the State in Africa* (Oxford UP, 1998), p. 117.

³³ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Globalectics: Theory and the Politics of Knowing* (Columbia UP, 2012), p. 84.

³⁴ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Something Torn and New: An African Renaissance* (Basic Civitas Books, 2009), p. 128.

³⁵ 楠瀬佳子「南アフリカの言語政策: マルチリンガリズムへの道」『京都精華大学紀要』(23), 2002, p. 52.

³⁶ *Ibid.*, p. 54.

- ³⁷ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Something Torn and New: An African Renaissance* (Basic Civitas Books, 2009), p. 95.
- ³⁸ 言語学的に主張の正確さを云々するよりも、あくまでこれはマイノリティのための宣言と取るべきだという指摘がある。Jan Blommaert, "The Asmara Declaration as a sociolinguistic problem: Reflections on scholarship and linguistic rights," *Journal of Sociolinguistics*, 5(1) (Blackwell Publishers Ltd, 2001)
- ³⁹ 宮本正興『評伝 グギ・ワ・ジオンゴ＝修羅の作家: 現代アフリカ文学の道標』(第三書館, 2014), pp. 446-447.
- ⁴⁰ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Penpoints, Gunpoints and Dreams: Towards a Critical Theory of the Arts and the State in Africa* (Oxford UP, 1998), p. 16.
- ⁴¹ Simon Gikandi, "The Epistemology of Translation: Ngũgĩ, *Matigari*, and the Politics of Language", *Research in African Literatures*, 22(4) (Indiana UP, 1991), p. 166.
- ⁴² Ngũgĩ wa Thiong'o, "Translated by the author: My life in between languages," *Translation Studies*, 2(1) (Routledge, 2009), p. 19.
- ⁴³ *Ibid.*, p. 19.
- ⁴⁴ *Ibid.*, p. 20.
- ⁴⁵ 秋草俊一郎「自己翻訳者の不可視性: その多様な問題」『通訳翻訳研究』(12), 2012, p. 157.
- ⁴⁶ John Walsh Hokenson らは、グギを "bilingual writers" の一人に数えているが、"self-translators" であるとは見なししていない。これは図らずもグギの本質を見抜いたものであると思われる。John Walsh Hokenson and Marcella Munson, *The Bilingual Text: History and Theory of Literary Self-Translation* (Routledge, 2014, first published St. Jerome Publishing, 2007), p. 164.
- ⁴⁷ Ngũgĩ wa Thiong'o, "Translated by the author: My life in between languages," *Translation Studies*, 2(1) (Routledge, 2009), p. 20.

第2章

- ¹ Ngũgĩ wa Thiong'o, "Translated by the author: My life in between languages," *Translation Studies*, 2(1) (Routledge, 2009), p. 20.
- ² 以下論文では、ケニアの国旗として議論がされている。William Slaymaker, "Digesting Crow: Reading and Teaching in Ngugi's *Wizard of the Crow*", *Research in African Literatures*, 42(4) (Indiana UP, 2011), p. 13.
- ³ 2007 年に開催された黒人研究会第 53 回全国大会では、ジンバブエの国旗について議論がされた。
http://hirage.cocolog-nifty.com/diary/2007/06/2007623_90ba.html (参照 2018-12-22) ここで私たちが言いたいのは、文学研究において表紙のデザイン等を議論することは珍しくないということである。ジェラルド・ジュネット『スイユ: テクストから書物へ』和泉涼一訳(水声社, 2001)を見よ。
- ⁴ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 16, 17, 73, 108, 248, 582
- ⁵ ジョージ・スタイナー『バベルの後に: 言葉と翻訳の諸相』亀山健吉訳(法政大学出版局, 1999) など。ウンベルト・エーコ『完全言語の探求』上村忠男ほか訳(平凡社ライブラリー, 2011) は、冒頭と末尾にバベルの塔の神話を配置している。
- ⁶ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Moving the Centre: The Struggle for Cultural Freedoms* (James Currey, 1993), p. 34.
- ⁷ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 16, 17.
- ⁸ ジャック・デリダ『バベルの言語』『他者の言語』高橋允昭訳(法政大学出版局, 1989)の論点のひとつ。
- ⁹ 語りを通じての治療は人類学者の仕事を参照することができる。日本語で読めるものに、ケニア東海岸部を扱った浜本満『信念の呪縛: ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』や、西部のテソ族を分析した長島信弘『死と病の民族誌: ケニア・テソ族の災因論』など。本論では、呪医とは何かという点には踏みこまない。ひとまず共有したい点は、妖術がケニアでは周知のものだということである。1925 年に定められた妖術法は現在も廃止されていない。浜本前掲書によると、「1990 年代半ばからケニアでは「悪魔崇拝」の浸透が公に論じられていた。ケニアの富と活力の流出をもくろむ IMF や世界銀行をも含んだ国際的陰謀が、悪魔崇拝という形でケニアの支配層や、学校の若者たちの間に浸透しているという噂で、1995 年には当時のモイ大統領自ら悪魔崇拝に対する非難の声明を出し、大統領の命令により悪魔崇拝を調査するキリマ大司教を委員長とした公的委員会が組織された(p. 111)」とのことだ。
- ¹⁰ Ngũgĩ wa Thiong'o, *Wizard of the Crow*, (Anchor, 2006), p. 379.
- ¹¹ デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』秋草俊一郎ほか訳(国書刊行会, 2011), p. 243. 同書では、自作の国際的な流通を通じて自らの精神が映しだされることをゲーテが「鏡像」と呼んだことが紹介されている(*ibid.* p. 19)
- ¹² Ngũgĩ wa Thiong'o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 355.
- ¹³ *Ibid.*, p. 543.
- ¹⁴ *Ibid.*, p. 542.
- ¹⁵ ジェレミー・マンディは、Daniel Gile の研究を参照し、通訳と翻訳は明確に区別できないと述べている。『翻訳論入門』鳥飼玖美子訳(みすず書房, 2009), p. 6.
- ¹⁶ Ian P. MacDonald, "The Cybogue Manifesto: Time, Utopia, and Globality in Ngũgĩ's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 47(1) (Indiana UP, 2016), p. 71.
- ¹⁷ ジャック・デリダ『バベルの言語』『他者の言語』高橋允昭訳(法政大学出版局, 1989)。 *Wizard of the Crow* のエピグラフで reader ではなく listener という単語が使用されていることを、Mustapha Ruma Bala はデリダの『他

者の耳』の議論と関連づけた。“African Literature and Orality: A Reading of Ngugi wa Thiong’o’s *Wizard of the Crow* 2007,” *Journal of English Language and Literature*, 3(3) (Tech mind Research, 2015)

¹⁸ これは秋草俊一郎による定義である。『ナボコフ 訳すのは「私」：自己翻訳がひらくテキスト』（東京大学出版会, 2011), p. 1. なお秋草は、元々は「自己翻訳」ではなく「自作翻訳」という用語を使用していた。

¹⁹ 秋草俊一郎『ナボコフ 訳すのは「私」：自己翻訳がひらくテキスト』（東京大学出版会, 2011), p. 8

²⁰ 研究の初期のものに、1998年のAdejunmobi, Mによる“Translation and Postcolonial Identity. African Writers and European Languages”がある。2004年にはElena Bandinが“The Role of Self Translation in the Decolonization Process of African Countries”を発表。自己翻訳が帝国主義への抵抗の戦略であったことが論じられた。論文末尾には自己翻訳を行ったアフリカの作家が列挙され、グギも名を連ねている。2017年のFella Benabed, “Ethnotextual mental translation and self-translation in African literature”には、グギのMental Translationについての説明もあるが、惜しむらくは*Wizard of the Crow*への言及がない。

²¹ 秋草俊一郎『ナボコフ 訳すのは「私」：自己翻訳がひらくテキスト』（東京大学出版会, 2011), p. 8.

²² *Ibid.*, pp.19-26.

²³ 次の論文では、そのことが揶揄的に記述されている。Henry Indangasi, “Ngugi’s Ideal Reader and the Postcolonial Reality,” *The Yearbook of English Studies*, (27) (Modern Humanities Research Association, 1997), p. 193, 197, 200.

²⁴ このような読解は、エドワード・サイードであれば「対位法的読解」と呼ぶものである。あるいは、リンダ・ハッチオンによるアダプテーションの理論を援用する余地もある。*Wizard of the Crow*を*Mũrogi wa Kagogo*のアダプテーションとして捉えることは「(略)つまり原作テキストを絶えず意識させられる作品として考えられることである。先行テキストを知っていれば、わたしたちは直接向かい合っているテキストにその存在が影を投げかけているのをつねに感じる」という体験を読者に要請することになるだろう」リンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』片淵悦久ほか訳（晃洋書房, 2012), p. 8.

²⁵ 秋草俊一郎『ナボコフ 訳すのは「私」：自己翻訳がひらくテキスト』（東京大学出版会, 2011), p. 15.

²⁶ Ngũgĩ wa Thiong’o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), pp. 8-9.

²⁷ エミリー・アブター『翻訳地帯: 新しい人文学の批評パラダイムにむけて』秋草俊一郎ほか訳（慶應義塾大学出版会, 2018), p. 150.

²⁸ Ian P. MacDonald は「イタリックで書かれている部分は、英語もしくはスワヒリ語であることは明確だろう」と述べている。“The Cybogue Manifesto: Time, Utopia, and Globality in Ngũgĩ’s *Wizard of the Crow*,” *Research in African Literatures*, 47(1) (Indiana UP, 2016), p. 73 *Devil on the Cross*では、イタリックの意味をグギ自身が脚注で説明していることを想起されたい。Ngũgĩ wa Thiong’o, *Devil on the Cross* (Heinemann Educational Books, 1982), p. 10.

²⁹ Ngũgĩ wa Thiong’o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 1.

³⁰ *Ibid.*, p. 488.

³¹ *Ibid.*, p. 488.

³² *Ibid.*, p. 491.

³³ なお、ポストコロニアリズム文学において注釈が使用されることは次第になくなってきた。「語句の注釈は、結果的に、その翻訳語、ひいては「受け入れ型」の文化に、より高い地位を認めてしまうからである」ビル・アッシュクロフトほか『ポストコロニアルの文学』木村茂雄訳（青土社, 1998), p. 122.

³⁴ Ngũgĩ wa Thiong’o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 77.

³⁵ *Ibid.*, p. 98.

³⁶ 一人称の代名詞の後に名前が置かれることは、会話文において比較的よく見られる。*Devil on the Cross* (Heinemann Educational Books, 1982), p. 43.など。

³⁷ Ngũgĩ wa Thiong’o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 169.

³⁸ *Ibid.*, p. 671.

³⁹ *Ibid.*, p. 7, 25, 135, 162, 169, 219, 285, 343, 344, 362, 364, 448, 462, 466, 477, 536, 544, 646, 671, 697.

第3章

¹ ジェレミー・マンディ『翻訳論入門』鳥飼玖美子訳（みすず書房, 2009）や、アンソニー・ピム『翻訳理論の探求』武田珂代子訳（みすず書房, 2010）など。Fella Benabedの“Ethnotextual mental translation and self-translation in African literature”では、カルチュラルスタディーズと翻訳研究が重ねられたことが指摘されている。

² アーニャ・ルーンバ『ポストコロニアル理論入門』吉原ゆかり訳（松柏社, 2001), p. 17-38.などを参照。

³ マーティン・タッカー『アフリカ: 文学的イメージ』山崎勉訳（彩流社, 1992), p. 391.

⁴ ヤンハインツ・ヤーン『アフリカの魂を求めて』黄寅秀訳（せりか書房, 1976), p. 237.

⁵ 『ポストコロニアル文学の現在』（晃洋書房, 2004）では、「キャンノンの書き換え」の例として以下作品が紹介されている。J. M. Coetzee, *Waiting for the Barbarians* (1980), *Foe* (1987), Maryse Condé, *La Migration des Coeurs* (1995), George Lamming, *The Pleasure of Exile* (1960), Derek Alton Walcott, *Omeros* (1990), Jean Rhys, *Quartet* (1928), *Voyage in the Dark* (1934), *Good Morning, Midnight* (1939), *Wide Sargasso Sea* (1966) グギに関していえば、*The River*

Between が Joseph Conrad, *Heart of Darkness* (1902) の書き直しであるというエドワード・サイードの指摘が有名である。『文化と帝国主義』2巻, 大橋洋一訳 (みすず書房, 2001), pp. 36-37

⁶ Simon Gikandi, “The Postcolonial Wizard,” *Transition*, 98 (Indiana UP, 2008), p. 164. イギリス文学で描かれた「屋根裏の狂女」の系譜を指摘するものもある。Ian P. MacDonald, “The Cybogue Manifesto: Time, Utopia, and Globality in Ngũgĩ’s *Wizard of the Crow*,” *Research in African Literatures*, 47(1) (Indiana UP, 2016), p. 65.

⁷ 「メリーさんの羊」の替え歌。Ngũgĩ wa Thiong’o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 30. ただし「マザーグース」は植民地主義とともに世界中に広まったとされるので、歌われていても不思議ではない。

⁸ 川端香男里『ユートピアの幻想』(講談社学術文庫, 1993), p. 243

⁹ 土屋哲『現代アフリカ文学案内』(新潮選書, 1994)、岡倉登志『西欧の眼に映ったアフリカ: 黒人差別のイデオロギー』(明石書店, 1999)、富山太佳夫「航海、帝国、ユートピア 18世紀小説論」『文化と精読: 新しい文学入門』(名古屋大学出版会, 2003)等を見よ。

¹⁰ 川端正久『アフリカ・ルネサンス: 21世紀の針路』(法律文化社, 2003), p. 186.

¹¹ グレゴリー・クレイズ『ユートピアの歴史』(東洋書林, 2013), p. 79.

¹² イマニュエル・ウォーラーステイン『ユートピクティクス』松岡利道訳 (藤原書店, 1999), p. 152. ハランベはスワヒリ語で「ともに働こう」の意。後年、この言葉を盾にして役人が資金集めを行ったため、ハランベ禁止令が出された。

¹³ Ngũgĩ wa Thiong’o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 63.

¹⁴ Gĩchingiri Ndĩgĩrĩgĩ, “Character Names and Types in Ngũgĩ wa Thiong’o’s *Devil on the Cross* and *Wizard of the Crow*,” *Ufahamu: A Journal of African Studies*, 38 (3) (James S. Coleman African Studies Center, UCLA, 2015), p. 210.

¹⁵ Ian P. MacDonald, “The Cybogue Manifesto: Time, Utopia, and Globality in Ngũgĩ’s *Wizard of the Crow*,” *Research in African Literatures*, 47(1) (Indiana UP, 2016)

¹⁶ Ngũgĩ wa Thiong’o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), p. 63.

¹⁷ *Ibid.*, p. 83.

¹⁸ *Ibid.*, p. 202.

¹⁹ *Ibid.*, pp. 153-157.

²⁰ 宮本正興『評伝 グギ・ワ・ジオンゴ=修羅の作家: 現代アフリカ文学の道標』(第三書館, 2014), p. 465.

²¹ Simon Gikandi, “The Postcolonial Wizard,” *Transition*, 98 (Indiana UP, 2008), p. 168.

²² Gĩchingiri Ndĩgĩrĩgĩ, “Character Names and Types in Ngũgĩ wa Thiong’o’s *Devil on the Cross* and *Wizard of the Crow*,” *Ufahamu: A Journal of African Studies*, 38 (3) (James S. Coleman African Studies Center, UCLA, 2015), p. 211.

²³ Ngũgĩ wa Thiong’o, *Wizard of the Crow* (Anchor, 2006), pp. 38-41.

終章

¹ *Matigari* のスペイン語翻訳者へのインタビューはこの種の研究の一つ。Natasha Himmelman and Rafael Segovia, “Translating *Matigari*: An Interview with Spanish Translator Rafael Segovia,” *Research in African Literatures* (Indiana UP, 2009)

² *Variksen Velho*, Werner Söderström Osaakeyhtiö, 2007.

³ <https://www.kirjavinkit.fi/kirjallisuus/palkinnot/tahtifantasia/tahtifantasia-voittaja-2008/> (参照 2018-12-22)

⁴ *El brujo del cuervo*, ALFAGUARA, 2008.

⁵ *Herr der Krähen*, A1 Verlag, 2011.

⁶ *Djävulen på korset*, Modernista, 2014.

⁷ <https://www.theeastafrican.co.ke/magazine/Ngugi-set-to-release-latest-Gikuyu-book/434746-4614630-nixusy/index.html> (参照 2018-12-22)

⁸ 書誌情報はほとんど見つけることができない。既に販売が開始されているらしく、購入用のウェブサイトがある。<https://www.nuria.co.ke/index.php/product/Kenda-Muiyuru-Rugano-rwa-Gikuyu-na-Mumbi-by-Ngugi-wa-Thiongo> (参照 2018-12-22)

参考文献

- 秋草俊一郎『ナボコフ 訳すのは「私」 自己翻訳がひらくテキスト』東京大学出版会, 2011.
 ———『自己翻訳者の不可視性: その多様な問題』『通訳翻訳研究』(12), 2012.
 アッシュクロフト, ビルほか『ポストコロニアルの文学』木村茂雄訳, 青土社, 1998.
 ———『ポストコロニアル事典』木村公一ほか訳, 南雲堂, 2008.
 アプター, エミリー『翻訳地帯: 新しい人文学の批評パラダイムにむけて』秋草俊一郎ほか訳, 慶應義塾大学出版会, 2018.
 アフリカ文学研究会編『民族・歴史・文学』三一書房, 1981.
 ウォラーステイン, イマニュエル『ユートピクティクス』松岡利道訳, 藤原書店, 1999.
 エーコ, ウンベルト『完全言語の探求』上村忠男ほか訳, 平凡社ライブラリー, 2011.
 岡倉登志『西欧の眼に映ったアフリカ: 黒人差別のイデオロギー』明石書店, 1999.
 川端香里『ユートピアの幻想』講談社学術文庫, 1993.
 川端正久『アフリカ・ルネサンス: 21世紀の針路』法律文化社, 2003.
 北島義信「インド、パキスタン、アフリカ文学における「土着」と「近代」: ハニフ・クレイシ、モーシン・ハミード、グギ・ワ・ジオンゴを中心に」『土着と近代: グローカルの大洋を行く英語圏文学』音羽書房鶴見書店, 2015.
 木村茂雄編『ポストコロニアル文学の現在』晃洋書房, 2004.
 グギ・ワ・ジオンゴ『一粒の麦』小林信次郎訳, 門土社, 1981.
 ———『アフリカ人はこう考える』アフリカ文学研究会訳, 宮本正興編, 第三書館, 1985.
 楠瀬佳子『南アフリカを読む: 文学・女性・社会』第三書館, 1994.
 ———「南アフリカの言語政策: マルチリンガリズムへの道」『京都精華大学紀要』(23), 2002.
 クレイズ, グレゴリー『ユートピアの歴史』東洋書林, 2013.
 サイド, エドワード『文化と帝国主義』1-2 巻, 大橋洋一訳, みすず書房, 1998, 2001.
 ジェレミー, マンディ『翻訳論入門』鳥飼玖美子訳, みすず書房, 2009.
 ジュネット, ジェラルド『スイユ: テキストから書物へ』和泉涼一訳, 水声社, 2001.
 スタイナー, ジョージ『バベルの後に: 言葉と翻訳の諸相』亀山健吉訳, 法政大学出版局, 1999.
 タッカー, マーティン『アフリカ: 文学的イメージ』山崎勉訳, 彩流社, 1992.
 土屋哲『現代アフリカ文学案内』新潮選書, 1994.
 ダムロッシュ, デイヴィッド『世界文学とは何か?』秋草俊一郎ほか訳, 国書刊行会, 2011.
 デリダ, ジャック『バベルの言語』『他者の言語』高橋允昭訳, 法政大学出版局, 1989.
 富山太佳夫『航海、帝国、ユートピア: 18世紀小説論』『文化と精読: 新しい文学入門』名古屋大学出版会, 2003.
 長島信弘『死と病の民族誌: ケニア・テソ族の災因論』岩波書店, 1987.
 ノルトマン=ザイラー, アルムート『新しいアフリカの文学』松田忠徳訳, 白水社, 1978.
 ハッチオン, リンダ『アダプテーションの理論』片淵悦久ほか訳, 晃洋書房, 2012.
 浜本満『信念の呪縛: ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』九州大学出版会, 2014.
 ピーターサ, コズモ・マンロ, ドナルド編『アフリカ文学の世界《増補改訂版》: アフリカ文学における抗議と闘争』小林信次郎訳, 南雲堂, 1983.
 ピム, アンソニー『翻訳理論の探求』武田珂代子訳, みすず書房, 2010.
 松田素二ほか編『ケニアを知るための55章』明石書店, 2012.
 マンディ, ジェレミー『翻訳学入門』みすず書房, 2009.
 宮本正興『文学から見たアフリカ』第三書館, 1989.
 ———『文化の解放と対話: アフリカ地域研究への言語文化論的アプローチ』第三書館, 2002.
 ———『評伝 グギ・ワ・ジオンゴ=修羅の作家: 現代アフリカ文学の道標』第三書館, 2014.
 ヤーン, ヤンハイנט『アフリカの魂を求めて』黄寅秀訳, せりか書房, 1976.
 ルーンバ, アーニャ『ポストコロニアル理論入門』吉原ゆかり訳, 松柏社, 2001.
- Antunes, Maria Alice Gonçalves. "Self Translation and Exile: A Study of the case of Ngũgĩ wa Thiong'o and Ariel Dorfman," *Cadernos de Tradução*, 38(1), Universidade Federal de Santa Catarina, 2018.
 Benabed, Fella. "Ethnotextual mental translation and self-translation in African literature," *Ars Aeterna*, 9(2), Sciendo, 2017.
 Blommaert, Jan. "The Asmara Declaration as a sociolinguistic problem: Reflections on scholarship and linguistic rights," *Journal of Sociolinguistics*, 5(1), Blackwell Publishers Ltd, 2001.
 Chakraborty, Amitayu. "Modes of Resistance in Ngugi wa Thiong'o's *Wizard of the Crow*," *Interdisciplinary Studies in Humanities*, 4(2), Rupkatha Journal, 2012.
 Colson, Robert L. "Arresting Time, Resisting Arrest: Narrative Time and the African Dictator in Ngũgĩ wa Thiong'o's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 42(1), Indiana UP, 2011.
 Fuertes, Elena Bandín. "The Role of Self-Translation in the Decolonisation Process of African Countries," *Estudios Humanísticos, Filología*, Universidad de León, 2004.

- Gikandi, Simon. "The Epistemology of Translation: Ngũgĩ, *Matigari*, and the Politics of Language", *Research in African Literatures*, 22(4), Indiana UP, 1991.
- . *Ngugi wa Thiong'o*, Cambridge UP, 2000.
- . "Traveling Theory: Ngugi's Return to English," *Research in African Literatures*, 31(2), Indiana UP, 2000.
- . "The Postcolonial Wizard," *Transition*, 98, Indiana UP, 2008.
- Glad, John, ed. *Literature in Exile*, Duke University Press Books, 1990.
- Granqvist, Raoul J. "Ngugi wa Thiong'o in/and 2006," *Research in African Literatures*, 42(4), Indiana UP, 2011.
- Himmelman, Natasha and Rafael Segovia. "Translating *Matigari*: An Interview with Spanish Translator Rafael Segovia," *Research in African Literatures*, Indiana UP, 2009.
- Himmelman, Natasha and Rafael Segovia. "Translating *Matigari*: An Interview with Spanish Translator Rafael Segovia," *Research in African Literatures*, Indiana UP, 2009.
- Hokenson, John Walsh and Marcella Munson. *The Bilingual Text: History and Theory of Literary Self-Translation*, Routledge, 2014, first published St. Jerome Publishing, 2007.
- Indangasi, Henry. "Ngugi's Ideal Reader and the Postcolonial Reality," *The Yearbook of English Studies*, (27), Modern Humanities Research Association, 1997.
- Jaggi, Maya. "The Outsider: an Interview with Ngũgĩ wa Thiong'o," *The Guardian*, 2006, Retrieved 20 May 2010.
- Jussawalla, Feroza and Reed Way Dasenbrock, ed. "Ngugi wa Thiong'o," In: *Interviews with writers of the Post-Colonial world*, UP of Mississippi, 1992.
- MacDonald, Ian P. "The Cybogue Manifesto: Time, Utopia, and Globality in Ngũgĩ's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 47(1), Indiana UP, 2016.
- Mustapha Bala, Ruma. "African Literature and Orality: A Reading of Ngugi wa Thiong'o's *Wizard of the Crow* 2007," *Journal of English Language and Literature*, 3(3), Tech mind Research, 2015.
- Ndĩgĩrĩ, Gĩchingĩ. "Character Names and Types in Ngũgĩ wa Thiong'o's *Devil on the Cross* and *Wizard of the Crow*," *Ufahamu: A Journal of African Studies*, 38 (3), James S. Coleman African Studies Center, UCLA, 2015.
- Ngũgĩ wa Thiong'o. *Weep not Child*, William Heinemann, 1964.
- . *The River Between*, Heinemann Educational Books, 1965.
- . *A Grain of Wheat*, Heinemann Educational Books, 1967.
- . *Petals of Blood*, Heinemann Educational Books, 1977.
- . *Devil on the Cross*, Heinemann Educational Books, 1982.
- . *Decolonizing the Mind: The Politics of Language in African Literature*, James Currey, 1986.
- . *Matigari*, Heineman Educational, 1987.
- . *Moving the Centre: The Struggle for Cultural Freedoms*, James Currey, 1993.
- . *Penpoints, Gunpoints and Dreams: Towards a Critical Theory of the Arts and the State in Africa*, Oxford University Press, 1998.
- . *Wizard of the Crow*, Anchor, 2006.
- . *Something Torn and New: An African Renaissance*, Basic Civitas Books, 2009.
- . "Translated by the author: My life in between languages," *Translation Studies*, 2(1), Routledge, 2009.
- . *Globalectics: Theory and the Politics of Knowing*, Columbia UP, 2012.
- Slaymaker, William. "The Disaffections of Postcolonial Affiliations: Critical Communities and the Linguistic Liberation of Ngugi wa Thiong'o," *symplekē*, 7(1-2), University of Nebraska Press, 1999.
- . "Digesting Crow: Reading and Teaching in Ngugi's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 42(4), Indiana UP, 2011.
- Smith, Brady. "Wizards, Superwonders, and a Fictional African State: Money and the Ecology of the Grotesque in Ngũgĩ wa Thiong'o's *Wizard of the Crow*," *Research in African Literatures*, 46(3), Indiana University Press, 2015.
- Walonen, Michael K. "Power, Patriarchy, and Postcolonial Nationalism in the African Dictator Novel," *Journal of the African Literature Association*, 6(1), Routledge, 2011.